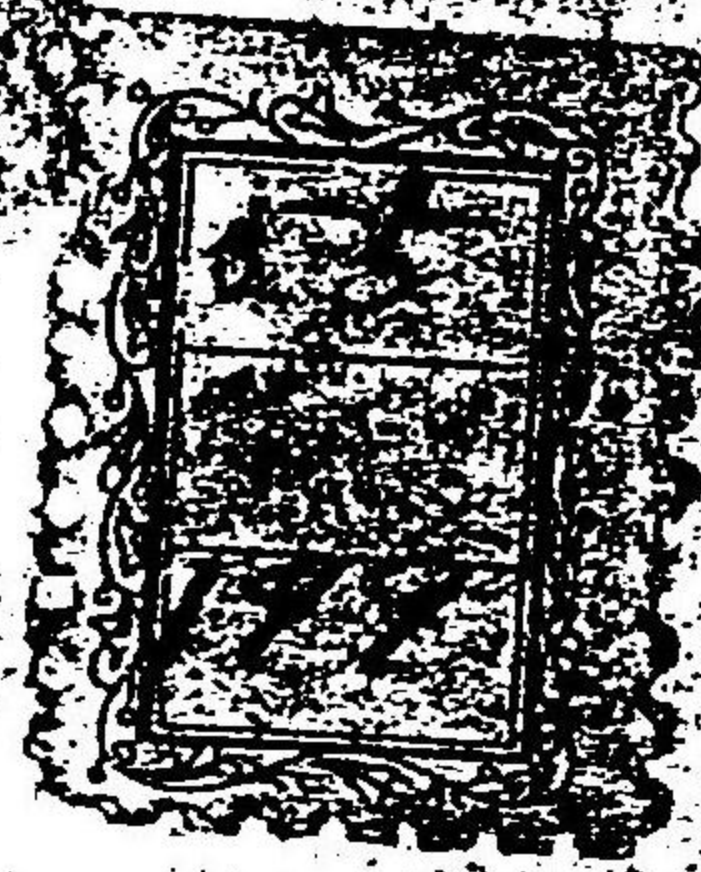


應_受用_驗
日本
地_歴理_史
問答



049636-000-9

特20-171

日本歴史地理問答(受験必読)

三尾 信太郎/著

M25

BEM-0339

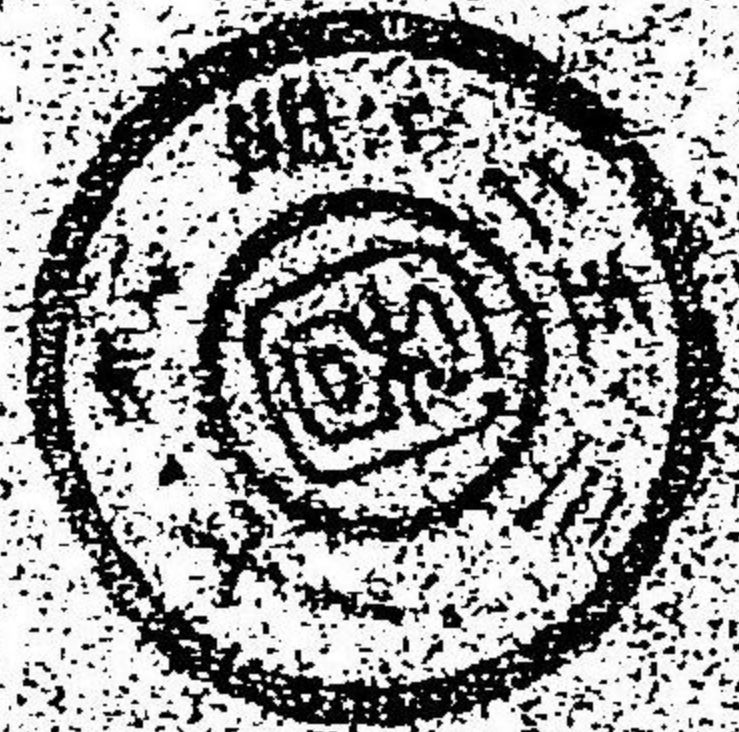


高等尋常中學校 師範學校 受驗用
其他諸學校 參考書

三尾信太郎先生著
佐藤正義先生閱

應用
本地歷史問答

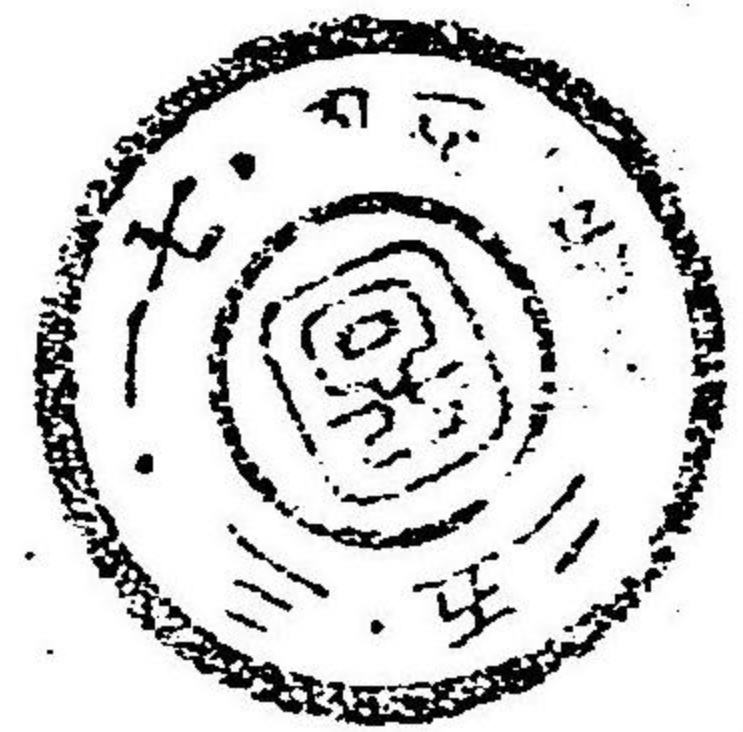
全



受驗日本歴史問答

目次

- 第一 天地開闢及ヒ日本國ノ元始
- 第二 天孫降臨ニ際シ天照大神ノ勅命如何
- 第三 神武天皇ノ東征如何
- 第四 四道將軍ヲ置キタルハ何帝ゾ
- 第五 狹穗彥ノ反
- 第六 相撲ノ起リタルハ何帝且ツ何が其初メナルカ
- 第七 熊襲ノ反
- 第八 日本武尊ノ東征
- 第九 日本武尊ノ陵ハ何所ニアリヤ
- 第十 大臣ヲ置クハ何帝ノ時ニシテ何人ナリシヤ
- 第十一 神功皇后ノ三韓征伐



- 第十二 文學技藝ノ傳來
第十三 漢字ノ傳來
第十四 二皇子位ヲ讓ル
第十五 仁德天皇ノ御聖德
第十六 佛經傳來
第十七 馬子守屋ヲ殺ス
第十八 蘇我馬子崇峻帝ヲ殺ス
第十九 女帝ノ始メ
第二十 日本法律ノ創設
第二十一 蘇我入鹿父子ヲ誅ス
第二十二 年號ノ始メ
第二十三 壬申ノ難ヲ陳述セヨ
第二十四 錢ヲ用ユル始メ

- 第二十五 藤原廣嗣ノ反
第二十六 惠美押勝謀反
第二十七 僧道鏡ノ反逆
第二十八 歷世ノ諡號ヲ定ム
第二十九 桓武天皇都ヲ山城ニ定ム
第三十 田村麿賊ヲ討テ敗ル
第三十一 弘仁ノ變
第三十二 攝政ノ始メハ何帝ノ時何氏ガ最モ其始メナルヤ
第三十三 出羽ノ俘夷ヲ撫納ス
第三十四 關白ノ始メ
第三十五 平氏ノ鼻祖
第三十六 菅原道真ヲ貶ス
第三十七 源氏累世武臣トナル

- 第三十八 天慶ノ亂
- 第三十九 安和ノ變
- 第四十 兼道兄弟職ヲ爭フ
- 第四十一 長元ノ亂
- 第四十二 關白賴通政柄ヲ執ル
- 第四十三 前九年ノ役
- 第四十四 後三年ノ役
- 第四十五 東國ノ武士源氏ノ家人ト云フハ如何
- 第四十六 平忠盛ハ如何ナル人ソ
- 第四十七 保元ノ亂
- 第四十八 平治ノ亂
- 第四十九 平氏ノ盛大
- 第五十 八歳ノ帝五歳ノ上皇アリシハ何帝ノ時ソ

- 第五十一 平清盛ノ驕恣
- 第五十二 治承ノ變
- 第五十三 平重盛ハ如何ナル人ソ
- 第五十四 平清盛ノ暴慢不敬
- 第五十五 源賴政以仁王ヲ奉シテ兵ヲ舉グ
- 第五十六 源賴朝兵ヲ舉シ
- 第五十七 平清盛薨ズ
- 第五十八 源義仲兵ヲ信濃ニ舉シ
- 第五十九 源義仲平氏ヲ討ツ
- 第六十 源賴朝義仲ヲ討チ滅ス
- 第六十一 一ノ谷ノ戰ヒ
- 第六十二 平氏滅亡
- 第六十三 鎌倉幕府ノ組織

- 第六十四 頼朝義経ヲ殺セシ故ヲ云フ
- 第六十五 頼朝陸奥征伐
- 第六十六 頼朝弟範頼ヲ殺セシ
- 第六十七 源家ノ亡ブ基
- 第六十八 北條氏頼家ヲ殺セシ原因
- 第六十九 北條時政畠山重忠ヲ殺セシ
- 第七十 義時執權トナル故ヲ問フ
- 第七十一 和田義盛兵ヲ起ス
- 第七十二 鶴ヶ岡ノ變
- 第七十三 承久ノ亂
- 第七十四 北條義時ノ專横
- 第七十五 三浦泰村ノ誅セラレシ原因
- 第七十六 化條時頼職ヲ辞シテ如何

- 第七十七 弘安ノ役
- 第七十八 將軍京都ニ流サルト云フ理由如何
- 第七十九 帝北條氏ヲ滅サント圖ル
- 第八十 元弘ノ亂
- 第八十一 楠正成金剛山ニ城ス
- 第八十二 新田義貞北條氏ヲ亡ス
- 第八十三 後醍醐天皇ノ中興
- 第八十四 藤原藤房帝ヲ諫ム如何
- 第八十五 足利尊氏護良親王ヲ排陷ス
- 第八十六 足利尊氏ノ反
- 第八十七 湊川ノ戰楠正成ノ戰死如何
- 第八十八 南朝北朝ト分立シタル原因
- 第八十九 足利尊氏皇太子ヲ鳩殺ス

- 第九十 新田義貞戰死
- 第九十一 四條畷ノ戰
- 第九十二 足利尊氏ノ勢力
- 第九十三 南北兩朝和合ス
- 第九十四 應永ノ亂
- 第九十五 赤松滿祐義教ヲ殺ス
- 第九十六 南朝遺臣乱ヲ起ス
- 第九十七 京師享德三年ニ乱ニ起ル其原因如何
- 第九十八 應仁ノ亂
- 第九十九 天文二十年嚴島ノ戰ヒ如何
- 第百 桶狹間ノ合戰ノ概略如何
- 第百一 松永久秀將軍ヲ殺ス
- 第百二 耶蘇傳來

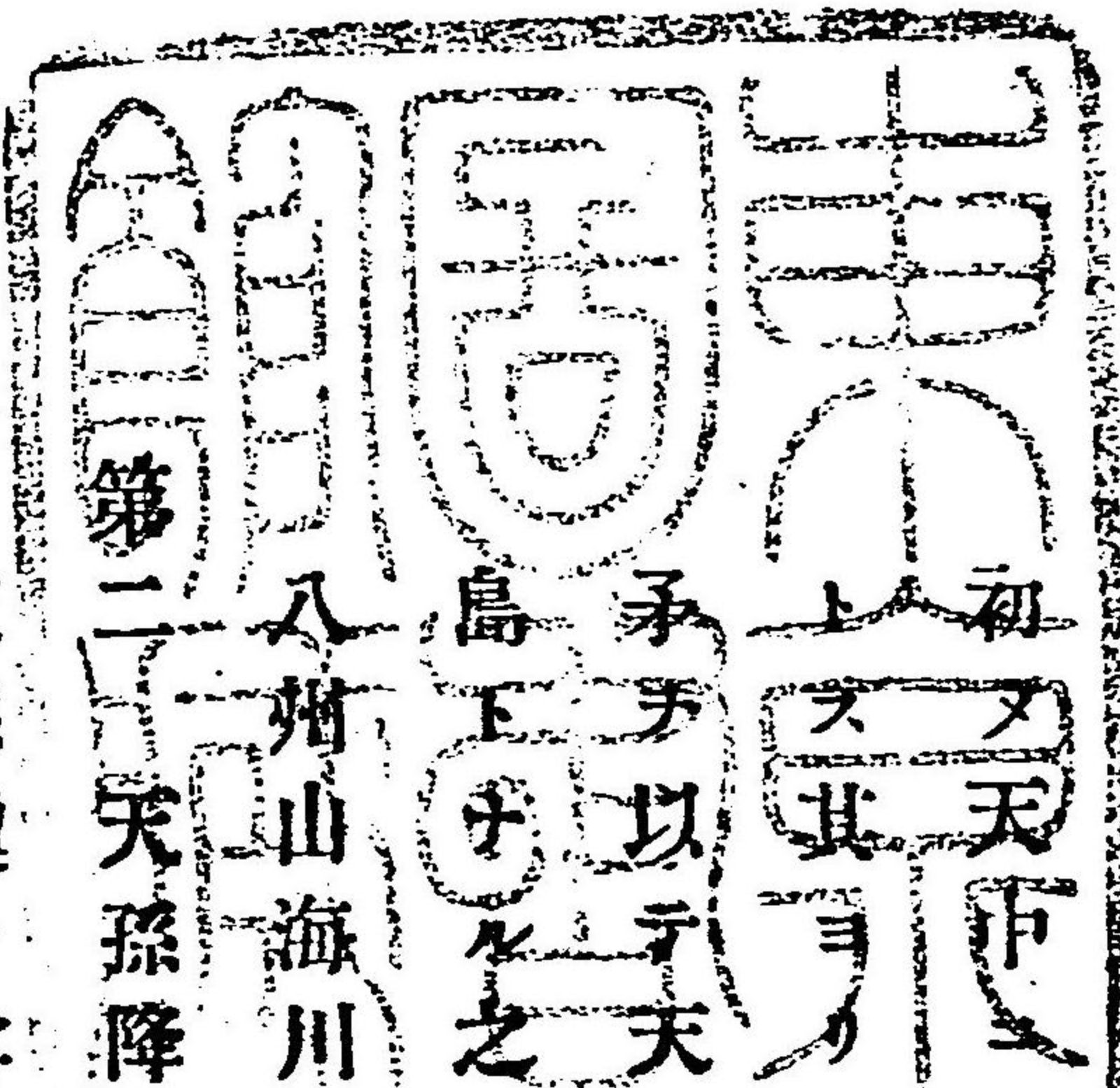
- 第百三 足利氏亡ブ
- 第百四 明智光秀主信長ヲ殺ス
- 第百五 秀吉光秀ヲ誅ス
- 第百六 賤ヶ岳ノ戰ヒ及ヒ七本槍トハ如何
- 第百七 豊臣秀吉朝鮮征伐ノ概略如何
- 第百八 朝鮮再征
- 第百九 關ヶ原ノ戰ヒ
- 第百十 大坂ノ役
- 第百十一 徳川幕府ノ法制
- 第百十二 天草ノ役
- 第百十三 慶安ノ亂
- 第百十四 櫻田ノ變
- 第百十五 臺灣征伐ノ概略ヲ舉ケヨ

第一百十六 西南ノ役ノ概略ヲ記セ
第一百十七 明治政府ノ組織如何

受驗 日本歴史問答目次終

受驗 日本歴史問答

三尾信太郎著



第一 天地開闢及ヒ日本國ノ元始

初メ天_ノ下_ニ天御中主神次ニ高皇產靈神神皇產靈神之ヲ造化ノ三神
上_ニ其_{ヨリ}天地成定スルヤ伊弉諾伊弉册ノ兩神ニ命シ給フニ天瓊
杵_ヲ以_テ天浮橋ニ立チ杵ヲ以_テ滄海ヲ採ル其杵ヨリ滴下シ凝リテ
島_トナリ之_ヲ名ケテ倣馭蘆島ト云フ二神之ニ降リテ夫婦トナリ大
八州山海川野草木其他萬物生ズ

第二 天孫降臨ニ際シ天照大神ノ勅命如何

天孫瓊々尊ヲ豐葦原中國ノ主トシ八坂瓊勾玉八咫鏡天叢雲劔ヲ授
ケ勅シテ曰ク葦原ノ瑞穗國ハ吾子孫ノ王タルヘキノ地ナリ爾宜シ
ク之ヲ治ムヘシ總テ國ヲ此三種ノ神器ノ如クセヨ寶祚ノ降ナルヲ

天壤ト窮リ無カルヘシト即天兒屋根命太玉命ヲ帥ヒ天降リテ日向高千穗宮ニ御ス

第三 神武天皇ノ東征如何

天皇日向高千穗宮ニ在リ諸皇族ト議シテ曰ク西國已ニ王化ヲ被ムルト雖モ東夷猶ホ互ニ争鬪ヲ事トシ嘗テ統一スルコトナシ依テ之ヲ征シテ天業ヲ弘メント欲スト遂ニ軍ヲ率ヒテ日向高千穗ノ宮ヲ發シ浪速ニ至リ生駒山ヨリ大和ニ入ラントス土豪長髓彦天神ノ子饒速日命ヲ奉シテ皇軍ヲ拒ク天皇利アラズ乃チ道ヲ轉シテ紀伊ヨリ大和ニ入り諸賊ト戰ヒ之ニ勝ツ饒速日命長髓彦ヲ殺シテ降ル是ニ於テ中州既ニ平ク大和ノ橿原ニ都ス

第四 四道將軍ヲ置キタルハ何帝ソ

崇神天皇ノ御世ニシテ將軍ヲ北陸東海西海丹波ノ四道ニ遣シ四方ヲ巡察セシム

第五 狹穗彦ノ反

垂仁天皇ノ御代ナリ皇后ノ兄狹穗彦不良ヲ圖リ皇后ヲ誘ヒ反チ行ハシメント天皇之ヲ知ル討テ之ヲ誅ス皇后兄ト共ニ焚死ス

第六 相撲ノ起リシハ何帝且ツ何人が其初メナルカ

垂仁天皇ノ御世野見宿禰當麻蹶速ト力ヲ角ス之レ相撲ノ儀ノ權興ナリ

第七 熊襲ノ反

熊襲ハ九州筑紫ニ住メル蠻族ナリ景行天皇十二年反ス天皇親ラ之ヲ征ス熊襲服ス二十七年八月又反ス皇子日本武尊ヲ遣シ之ヲ討ツ酋長川上梟帥ヲ刺殺ス筑紫悉ク平ク

第八 日本武尊ノ東征

天皇東夷ヲ平ラケント欲シ日本武尊ヲ遣ス尊先ツ伊勢ニ至リ皇太神宮ヲ拜シ倭姫命ニ辭シテ曰ク今詔ヲ被テ東夷ヲ誅セントス是ニ

於テ倭姫命寶劔ヲ授ク尊進テ駿河ニ至ル賊陽從尊ヲ欺テ遊獵セシム賊郊ニ火ヲ放チ之ヲ圍ム尊直チニ寶劔ヲ拔キ草ヲ薙キ攘ヘハ風俄ニ變リ賊軍エ吹靡キ猛火盛ナレバ賊軍驚キ走ル即チ擊テ之ヲ平ク之ヨリ奥州蝦夷ヲ征シ途ニテ病アリ遂ニ能褒野ニ薨ス

第九 日本武尊ノ陵ハ何所ニアルヤ

白鳥塚ト云フ伊勢國鈴鹿郡高宮村ニアリ其地ノ人誤チ之ヲ鷲塚ト云フ

第十 大臣ヲ置キタルハ何帝ノ時ニシテ何人ナリシヤ

成務天皇三年武内宿禰ヲ以テ大臣トス之レ大臣ノ始メナリ

第十一 神功皇后三韓征伐

皇后新羅ヲ征セント欲シ船艦ヲ集メ甲冑ヲ修メ兵ヲ率ヒテ渡海進發ス旗色日ニ輝キ鼓聲天ニ震フ新羅王出テ降ル是ニ於テ金銀綾羅ヲ船八十艘ニ載テ献ズ又毎歲ノ貢額トナス高麗百濟并ニ風ヲ望ン

テ附ス戌ヲ置キ貢ヲ定メテ凱旋ス

第十二 文學技藝ノ傳來

神功皇后ノ三韓征伐ヨリ新羅高麗百濟ト交通絶エズ之レヨリ文學技藝多ク傳來シ我國開化日ニ進ミテ風俗一變セリ

第十三 漢字傳來

應神天皇ノ御世ニ至リ百濟ヨリ博士王仁來朝シテ論語及ヒ千字文ヲ献ズ之ヨリ漢字我國ニ行ハル

第十四 皇子位ヲ讓ル

應神帝嘗テ稚郎子ヲ愛セラル立テ、太子トス其兄ノ賢明ナルヲ知リ帝崩スルヤ直ニ位ヲ大鷦鷯皇子ニ讓リ避テ菟道ニ之ク皇子モ亦固辭ス相讓ルコト三年太子遂ニ自殺ス皇子已ムコトヲ得ス位ニ即ク

第十五 仁德天皇ノ御聖德

帝聰明仁心深ク帝高臺ニ登リ人家ニ煙ノ稀ナルヲ見テ民ノ貧困ヲ

知リ自ラ節儉ヲ行ヒ玉ヒ窮乏ヲ賑ハス宮垣破壊シ屋宇穿漏スレモ敢テ之ヲ修繕セズ爾來五穀豐穰百姓殷富ナリ帝復タ臺ニ登ル炊煙ノ盛ナルヲ見テ喜テ曰ク朕既ニ富メリ天ノ君ヲ立ルハ民ノ爲ナリ民ノ富ルハ即チ朕ガ富ルナリト民宮殿ヲ修繕ゼンコトヲ請フ可カス此年之ヲ聽ス民子ノ如ク來ル

第十六 佛經傳來

欽明天皇十三年百濟ヨリ佛像及ヒ經論ヲ獻ズ大臣蘇我稻目之ヲ受ント請フ物部尾輿、中臣勝海不可トナス帝佛像ヲ稻目ニ賜フ是ヲ受テ祀ル時ニ疫病大ニ流行ス尾輿等奏シテ曰ク神ノ怒ル所ト遂ニ寺ヲ燒キ佛像ヲ棄ツ

第十七 馬子守屋ヲ殺ス

用明天皇ノ四月崩ズルヤ守屋穴穗皇子ヲ立ント欲ス馬子兵ヲ遣シ皇子ヲ殺シ又廐戸ト俱ニ守屋ヲ攻殺ス

第十八 蘇我馬子崇峻帝ヲ殺ス

崇峻帝五年馬子策立ノ功ヲ恃ミ專横甚シ帝其驕暴ヲ惡ミ或時悲憤ノ語アリ馬子悞レ東漢駒ヲシテ帝ヲ寢殿ニ殺ス廐戸哭シテ曰ク帝過去ノ報ナリ

第十九 女帝ノ始メ

馬子、豊御飯炊屋姫皇后ヲ立テ位ニ即カシム之レ我國女帝ノ始メナリ之ヲ推古天皇ト云フ

第二十 日本法律ノ創設

推古天皇ノ御世皇太子廐戸皇子憲法十七條ヲ頒ツ之レ法律ノ始メナリ

第廿一 蘇我入鹿父子ヲ誅ス

蘇我蝦夷子入鹿ト共ニ政ヲ執リ專横日ニ益々甚シ中大兄皇子中臣鎌足等ト謀リ入鹿ヲ大極殿ニ殺シ兵ヲ遣シ蝦夷ヲ誅ス

第二十二年 年號ノ始メ

孝徳天皇大化年之レ本朝ノ年號ノ始メナリ

第廿三 壬申ノ難ヲ陳述セヨ

天智天皇大友皇子ヲ太子トス崩ズルニ臨ミテ後事ヲ皇弟大海人皇子ニ屬ス太子立ツルニ及テ皇子兵ヲ吉野ニ擧グ帝之ヲ拒ク皇子ノ將大友吹負村國男依等帝軍ヲ破ル帝近江ニ敗走ス諸大臣皆逃ル天皇物部麿ト走テ山前ニ至リ親ラ縊レテ崩ズ壽二十五之ヲ壬申ノ難ト云フ

第廿四 錢ヲ用フル始メ

天武帝十二年始メテ銅錢銀錢ヲ行フ後鑄錢司ヲ置ク

第廿五 藤原廣嗣ノ反

僧玄昉皇后ニ寵セラル專恣甚シ廣嗣上書シテ僧玄昉下道眞備ノ姦ヲ奏スレモ聽カレズ遂ニ兵ヲ筑紫ニ擧ゲ君側ヲ清メント欲ス事ナ

ラスシテ誅セラル

第廿六 惠美押勝謀叛

孝謙上皇ニ寵セラル大帥ニ任シ正一位ニ叙ス僧道鏡入侍スルニ及テ寵衰フ押勝憤怨シ不良ヲ圖リ上皇ニ諷シテ都督兵事使トナリ官印ヲ用ヒテ兵ヲ發ス事覺ハレテ近江ニ走ル藤原藏下麿等討テ其軍ヲ破ル尋テ之ヲ獲斬ス

第廿七 僧道鏡ノ反逆

宇佐神官阿曾麻呂道鏡ニ阿諛シ神教ニ託シテ曰ク道鏡ヲノ即位セシメハ天下泰平ナラント奏ス帝之ニ惑ヒ和氣清麻呂ヲ宇佐ニ遣ハシテ神教ヲ受ケシム發スル臨テ道鏡清麻呂ニ謂テ曰ク予ノ望ミニ叶フナハ汝ヲ以テ大臣トナサン否ザレバ劍アルノミト清麿宇佐ヨリ歸リ神語ヲ奏シテ曰ク我國開闢以來君臣ノ分定レリ天日嗣ハ必ズ皇緒ヲ立テ非道ヲ望ム者ハ速ニ誅戮スヘシト奏シケレバ百官色

ヲ失フ道鏡大ニ怒リ清麿ヲ大隅ニ流ス後光仁天皇即位シ道鏡ヲ下野ニ流シ清麻呂ヲ官位ニ登ラシム

第廿八 歷世ノ諡號ヲ定ム

古來列帝皆稱スルニ諱ヲ以テセリ孝謙帝ノ朝淡海三船勅ヲ奉シテ神武以來ノ諡號ヲ定ム

第廿九 桓武天皇都ヲ山城ニ定ム

桓武天皇十二年都ヲ葛野郡ニ築ク翌年都ヲ遷ス詔シテ曰ク此地ノ形勝山河襟帶自然ニ城ヲ成ス士民又謳歌シテ平安ト呼ブ山背ヲ改テ山城ト曰ヒ京師ト稱シテ平安城ト云フ

第三十 田村麻呂賊ヲ討テ敗ル

蝦夷屢々邊境ヲ侵ス桓武帝田村麻呂ニ命シテ之ヲ討タシム田村麻呂十餘年屢々賊軍ヲ破リ遂ニ其巢窟ニ入リテ酋長ヲ誅シ多ク浮虜ヲ獲タリ又城ヲ鑿澤ニ築キ東國ノ浮流四千人ヲ配シテ之ニ成ス是

ヨリ蝦夷永ク王化ニ歸シ東陲清平ナリ

第三十一 弘仁ノ變

嵯峨天皇弘仁元年上皇尙侍藥子寵ヲ怙ミ其兄藤原仲成ト謀リ旨ニ託シテ復位ヲ勸メ上皇ヲ奉シテ東ニ走ル天皇田村麻呂ニ勅シテ要路ヲ塞ク上皇ノ衆潰散ス藥子藥ヲ仰ク死ス仲成誅セラル之ヲ弘仁ノ變ト云フ

第三十二 攝政ノ始ハ何帝ノ時ニシテ何氏ガ最モ其始メナルヤ

文徳天皇ノ御代藤原良房攝政ス外戚攝政ノ始メナリ

第三十三 出羽ノ俘夷ヲ撫納ス

出羽ノ民夷ト雜居ス姦吏豪戶私利ヲ規リ編氓ヲ困マシム夷種相怨ミ遂ニ乱ヲ起シテ城邑ヲ燒ク藤原保則ヲ出羽權ノ守トシ小野春風ヲ鎮守府將軍トシ討テ之ヲ平ク

第三十四 關白ノ始メ

宇多天皇立ツヤ萬機皆ナ藤原基經ニ關白セシム關白ノ稱此ニ始マ
ル

第三十五 平氏ノ鼻祖

宇多天皇ノ朝桓武帝四世ノ孫高望玉ニ姓ヲ平氏ト賜フ之レ平氏ノ
祖ナリ

第三十六 菅原道真ヲ貶ス

菅原道真右大臣トナル左大臣藤原時平ト政ヲ執ル道真賢明時望高
シ天皇法皇ト議シ政ヲ關白セシメントス道真固辭ス時平之ヲ得ン
ト欲スレ下ラス遂ニ道真ヲ譏シ太宰府ノ權帥トナス法皇救ント
スレ得ズ

第三十七 源氏累世武臣トナル

清和天皇ノ六子貞純親王ニ源ノ姓ヲ賜フ之レヨリ源氏世々武將ト
ナル

第三十八 天慶ノ乱

平將門攝政忠平ニヨリ檢非違使ヲラフヲ求ム忠平聽カズ乃東國ニ
走リ常陸大椽國香ヲ殺シ常陸ヲ取レリ與世王ト謀リ兵ヲ起シテ關
東八州ヲ取ル終ニ偽名ヲ下総ノ猿島ニ建テ自稱シテ平親王ト云フ
朝議藤原忠文ヲ征東大將軍トナシ之ヲ討シム未發セズ是レヨリ先
キ香ノ子平貞盛父ノ仇ヲ報セント欲シ下野ノ押領使藤原秀郷ト謀
リ兵ヲ合シテ將門ヲ討チ終ニ其首ヲ斬ル與世王以下悉ク平ク純友
ヲ誅ス賊全ク平ク忠文等皆ナ道ヨリ歸ル之ヲ天慶ノ乱ト云フ

第三十九 安和ノ變

冷泉帝安和二年橘繁延藤原千晴等潛コ爲平親王ヲ間ミ乱ヲナサハ
テ謀ル源滿仲討テ之ヲ平ク安和ノ變之レナリ

第四十 兼通兄弟職ヲ爭フ

關白兼通政ヲ專ニス弟兼家ト相協ハス兼家其疾危篤ナルヲ聞テ遽

ニ朝參ス兼通疾ヲ勉テ入朝シ奏シテ左大臣賴忠ヲ以テ巳ガ職ニ代
ラシメ兼家ノ見任ヲ解ク

第四十一 長元ノ乱

上介忠常乱ヲ東國ニ作ル平直方ヲシテ之ヲ討タシム利アラズ朝議
依テ源賴信ニ命シ坂東ノ兵ヲ發シテ之ヲ討ツ忠常湖水ニ臨ミテ疊
壁ヲ列シテ悉ク舟楫ヲ収ム賴信湖水ヲ濟リ攻メテ之ヲ平ク

第四十二 關白賴通政柄ヲ執ル

賴通父道長ニ代リテ攝政トナリ三帝ノ政柄ヲ執リ最驕侈ヲ窮ム

第四十三 前九年ノ役

陸奥ノ酋長安倍賴時亂ヲ起ス賴時父祖ノ世ヨリ酋長トナリ其ノ族
強大ニシテ貢租ヲ納レズ其レリ亂ヲ作ル朝廷源賴義ニ命シテ之ヲ
討シム賴義屢戰ヒ遂ニ之ヲ滅セリ然レ尙賴時ノ子貞任宗任等勢猶
張ル賴義子義家ト共ニ之ヲ攻ム勝敗決セズ終ニ出羽ノ人清原武則

來リ助力ス苦戰スルヲ九年遂ニ貞任ヲ誅シ宗任ヲ降ラシム之ヲ前
九年ノ役ト云フ

第四十四 後三年ノ役

初メ清原武則功ヲ以テ鎮守府將軍トナル孫眞衡弟家衡叔父眞衡ト
與シテ兄ニ背キ兵ヲ以テ相攻ム義家守タルニ及ヒ眞衡ヲ助ケ家衡
ヲ攻ム利アラズ義家ノ弟義光兄ノ軍利アラズト聞キ赴キ助ハント
謂フ朝廷之ヲ聽カズ依テ官ヲ捨テ來リ力ヲ戮セテ相戰フコト三年
遂ニ武衡家衡ヲ斬ル是ニ於テ悉ク眞羽ヲ平ク之ヲ後三年ノ戰ト云
フ

第四十五 東國ノ武士源氏ノ家人ト云フハ如何

後三年ノ戰ヒ終ルヤ此儀京師ニ奏ス朝議以テ私闘トナシ賞ヲ行ハ
ス義家賞ヲ出スニ私費ヲ以テス故エニ東國ノ武士朝廷ニ屬セス自
ラ源氏ノ家人ナリト稱セリ

第四十六 平忠盛ハ如何ナル人ゾ

平貞盛六世ノ孫ナリ世々武名ヲ以テ顯ル伊賀伊勢ノ間ニ居ル白河鳥羽二上皇ニ仕エ并ニ寵アリ平氏之レヨリ家ヲ興ス忠盛ノ妻ハ白河帝ノ宮人ナリ一男ヲ生ム之ヲ清盛ト云フ

第四十七 保元ノ亂

近衛天皇崩シテ嗣ナシ崇徳上皇復ヒ位ニ即ントス鳥羽法皇美福門院ト議シ位ヲ上皇ノ弟ニ讓ル之ヲ後白河帝ト成ス上皇憤恚ス遂ニ賴長ト謀ル物情洵然タリ七月法皇崩ズ即夜之レヲ葬ル上皇兵ヲ擧ケテ白河殿ニ據ル賴長謀主タリ源爲義子賴賢爲等ト俱ニ詣ル上皇戰ヲ議ス賴長爲義ノ發議ヲ納レス既ニシテ爲義ノ長子義朝清盛炬ヲ連ネテ來リ攻ム爲義等善ク拒グ戰ヒ未タ決セス義朝火ヲ上風ニ放チ煙燄宮ヲ燒シ白河殿陥リ上皇如意山ニ走ル賴長流矢ニ中テ薨ス上皇ヲ讚岐ニ徙シ爲義ヲ斬リ爲朝ヲ伊豆大島ニ流ス之ヲ保元ノ

亂ト云フ

第四十八 平治ノ亂

藤原信賴上皇ノ寵ニ依リ驕恣ナリ上皇ニ請フテ近衛大將タラントス信西竊ニ之ヲ拒ム信賴之ヲ恨ミ反志ヲ起ス平清盛モ亦保元ノ亂ニ功アルヨリ勢位義朝ノ上ニ出ズ由リテ不平ナリ之ニ於テ信賴義朝ト深ク相結合シ藤原惟方藤原經宗等ト謀ル清盛等ノ熊野ニ赴クヲ伺ヒ遂ニ兵ヲ擧ゲテ宮ヲ圍ミ天皇及ヒ上皇ヲ幽シ信西ヲ殺ス信賴自ラ大臣大將ト稱シ義朝ヲ播磨守トナシ以下盡ク官ヲ授ケ朝餉所ニ居リ諸政ヲ專決ス公卿以下皆俯伏シテ位ニ倍ス己ニシテ清盛變ヲ聞キテ京師ニ還リ帝ヲ宮中ヨリ出シ清盛ガ六波羅ノ第二居ル上皇モ亦逃レテ仁和寺ニ至ル是ニ於テ清盛勅ヲ奉シ子重盛等ヲ遣シ信賴義朝ヲ大内ニ攻ム重盛走り出テ敵ヲ誘ヒ宮ヲ出サシメ横ヨリ大内ニ入り復ス義朝轉シテ六波羅ヲ攻ム利アラズシテ尾張ニ至

リ長田忠致ニ殺サル信賴仁和寺ニ來リ哀ヲ上皇ニ請フ上皇之ヲ帝ニ請フ帝聽カレズ遂ニ誅セラル

第四十九 平氏ノ盛大

平氏桓武天皇ヨリ出テ世々武臣タリ清盛保元ノ亂ニ功アリ尋テ又平治ノ亂ニ功アリテ官追昇遂ニ從一位大政大臣ニ至リ隨身兵仗ヲ賜ヒ輦車宮ニ入ルヲ許サレ太功田ヲ賜フ子重盛近衛大將トナル弟宗盛參議トナリ采地天下ニ半ス其他平族皆高官ニアリ

第五十 八歳ノ天皇五歳ノ上皇アリシハ何帝ノ時ソ

憲仁親王ヲ立テ皇太子トシ尋ギテ六條帝ヲシテ位ヲ讓ラシム之ヲ高倉帝トス帝八歳六條上皇五歳タリ

第五十一 平清盛ノ驕恣

清盛病アリ剃髮シテ淨海トイフ人呼テ大政入道ト稱ス勢益々盛ナリ既テ朝政清盛ノ手ニ出ツ淫刑濫賞頗多シ法皇之ヲ惡メ凡能ク制

ス能ハス清盛第ヲ西八條ニ造リ又別第ヲ福原ニ營ミ專横益々甚シ平族皆榮華ヲ極ム

第五十二 治承ノ變

大納言藤原成親西光ト謀リ源行綱平康賴僧寬俊等ト深ク相結約シ平氏ヲ滅ボサント謀ル法皇モ亦之ニ臨マントス法印靜憲之ヲ諫メ止ム既ニシテ源行綱變心謀ヲ清盛ニ告グ清盛成親西光ヲ殺シ成親ノ子成經康賴俊寬ヲ疏黃島ニ流ス清盛法皇ヲ鳥羽殿ニ幽セントス子重盛泣テ之ヲ諫ム

第五十三 平重盛ハ如何ナル人ソ

小松重盛トイフ内大臣タリ性忠恪沈毅ニシテ度量アリ中外望ヲ属ス父清盛專横甚シ重盛之ヲ憂懼シ遂ニ死ヲ熊野ノ社ニ祈リ病ヲ得テ薨ズ

第五十四 平清盛ノ暴慢不敬

治承ノ變ヨリ清盛法皇ヲ怨ミ重盛薨スルヤ直チニ兵ヲ率ヒテ法住寺殿ヲ圍ミ法皇ヲ鳥羽殿ニ幽シ又關白藤原基房以下三十九人ノ官職ヲ削リ之ヲ貶竄ス

第五十五 源賴政以仁王ヲ奉シテ兵ヲ舉グ

賴政以仁王ヲ奉シ兵ヲ舉グ平氏ヲ滅サント欲シ令旨ヲ源氏ニ下シ東國ノ兵ヲ發ス平氏大ニ驚キ兵ヲ遣シ拒キ戰シム賴政利アラス王ト與ニ走ル王流矢ニ中リテ薨ス賴政遂ニ自殺ス

第五十六 源賴朝兵ヲ舉ク

賴朝北條時政ト謀リ兵ヲ伊豆ニ舉ク伊豆相摸ノ豪傑皆ヲ賴朝ニ應ス伊豆ノ日代山木兼隆ヲ攻殺シ進テ石橋山ニ軍ス大庭景親來リ攻ム逃レテ安房ニ至ル北條時政三浦義澄等ニ遇フ兵又集ル平廣常兵ヲ率ヒテ來リ屬ス賴朝進テ富士川ニ陣ス清盛奏シテ孫維盛弟忠度等ヲ將トシ兵五萬騎ヲ率ヒ來リ辭シテ未タ戰ハズ平軍夜水禽ノ起

ルヲ聞キ驚キ源兵至ルト軍中騷擾シ自相蹈籍シ走リテ京師ニ歸ル是ヨリ先キ賴朝弟義經陸奥ヨリ來リ賴朝ニ附ス

第五十七 平清盛薨ズ

清盛宗盛ヲシテ東、賴朝ヲ討マント欲シ未發セズ清盛熱病ヲ患ヒ病日ニ甚シ家族枕ニ集ル言ハント欲スル所ヲ問フ清盛苦息シテ曰ク我位人臣ヲ極メ身國家ノ外祖トナル奚ソホムルコトアランヤ唯恨ムルハ未タ賴朝ノ首ヲ見ザルノミ汝等宜ク賴朝ノ首ヲ斬リ我墓前ニ納メヨト遂ニ薨ス

第五十八 源義仲兵ヲ信濃ニ舉ク

義仲ハ爲義ノ孫義賢ノ子ナリ幼ニシテ孤トナリ木曾山中ニ成長ス常ニ我宗族ノ衰ヘタルヲ慨キ平氏ヲ滅サントス時ニ以仁王ノ令旨至ルヤ遂ニ兵ヲ信濃ニ舉ク是ニ於テ北陸道ノ諸豪傑來リ屬ス

第五十九 源義仲平氏ヲ討ツ

義仲信濃ヨリ起ル平宗盛維盛ニ大軍ヲ授ケ之ヲ撃タシム維盛大ニ敗走ス義仲勝ニ乗シテ西ニ上リ遂ニ近江ニ入り比叡山ニ據ル法皇之ニ幸ス宗盛安德帝ヲ奉シテ神器ヲ擁シ西國ニ逃ル義仲京師ニ入ル法皇之ニ官位ヲ賜フ

第六十 源賴朝義仲ヲ討チ滅ス

賴朝弟範賴義經等ヲシテ義仲ヲ討タシム範賴勢多ヨリ攻ム義經宇治ヨリ攻ム義仲今井兼平根井行親等ヲシテ宇治熱田ヲ拒キ守ラシム義經進テ宇治川ニ至ル佐々木高綱梶原景時先登シテ義仲ノ軍ヲ破ル義仲敗走シ法皇ノ宮ニ至ル義經又撃ツ既ニシテ範賴勢多ヨリ進ミ撃ツ義仲大ニ敗レ走リテ粟津ニ至ル馬渚ニ陥リ箭額ニ中リテ死ス

第六十一 一ノ谷ノ戰

平氏安德天皇ヲ奉シテ屋島ヨリ福原ニ遷リ城ヲ一ノ谷ニ築キ兵威

ヲ振フ法皇賴朝ニ勅シテ平氏ヲ討タシム賴朝乃チ弟範賴義經ヲ遣シ之ヲ討ツ義經ハ鵜越ヨリ下リ火ヲ城ニ放チ攻撃ス範賴モ亦東西門ヲ破リテ三面合撃終ニ之ヲ敗ル宗盛帝ヲ奉シテ海ヲ航シテ屋島ニ逃ル平氏ノ將忠度通盛經正知章經俊業盛盛俊師盛敦盛等皆戰死ス重衡虜ニセラル

第六十二 平氏滅亡

平宗盛安德帝ヲ奉シテ屋島ニ逃ルヤ範賴義經又攻ム義經平氏ト壇ノ浦ニ戰フ田口成良變心義經ニ降リ平氏ノ機ヲ語ル平氏大ニ敗ル二位尼帝ヲ抱キ海ニ没シテ死ス帝御年八歳ニテ崩ス平氏ノ將皆ナ死ス宗盛虜ニセラル后遂ニ殺サル平氏滅亡此ニ至ル

第六十三 鎌倉幕府ノ組織

政所間注所待所アリ政所ハ別當以下ノ數職ヲ置キ天下ノ政令ヲ掌ドリ庶務ヲ行フ大江廣元ヲ別當トナシ政令ヲ出サシム間注所ハ執

事寄人等ノ職ヲ置キ訴訟ナ判決スルヲ掌ル三善康信ヲ執事トナシ訟獄ヲ決セシム待所ハ別當所司等ノ職ヲ置キ軍事ヲ議シ非違ヲ檢察シ兼テ警衛ヲ掌ル和田義盛ヲ別當トナシ梶原景時ヲ所司トナシ兵事警衛ヲ掌ラシム其他諸國ニ守護地頭ヲ置キ武事租稅ヲ司ラシム

第六十四 賴朝義經ヲ殺セシ故ヲ問フ

賴朝常ニ義經ノ才ヲ忌ム又梶原景時ト逆櫓ノ事ニ劇論ス景時賴朝ニ讒ス賴朝怒リ義經ヲ殺サント圖リ潛ニ昌俊ヲ遣シ義經ノ第ヲ襲フ義經之ヲ殺シ而シテ走ル賴朝又藤原泰衡ニ命シ之ヲ討マシム衣川ニ戰ヒ遂ニ攻殺スト又云フ逃レテ蝦夷ニ有リト

第六十五 賴朝陸奥征伐

賴朝大ニ兵ヲ徵シ藤原泰衡久シク義經ヲ庇ヒシヲ以テ之ヲ討マント奏請フ未タ許サス賴朝詔ヲ待タズシテ東下シ大軍ヲ以テ三道ヨ

第六十六 賴朝弟範賴ヲ殺セシ

リ進ミ攻ム泰衡敗レ城ヲ燒テ逃走陸奥ニ至リ遂ニ家臣ノ爲ニ殺サル是ニ於テ陸奥平ク賴朝陸奥ヲ鎮撫シ政皆舊制ニ遵フ民皆悅服ス
賴朝大ニ富士野ニ狩ス時ニ曾我兄弟祐成時致父仇工藤祐經ヲ殺ス此變アルヤ鎌倉訛傳ス賴朝害ニ逢フト夫人驚キ泣ク範賴之ヲ慰安シテ曰ク憂フルナカレ範賴アリト賴朝之ヲ聞テ怒ル範賴悞レ書ヲ以テ之ヲ謝ス書ニ源範賴ト姓ヲ書スルヲ見テ益々怒リ遂ニ之ヲ伊豆ニ逐フ後チ兵ヲ遣シ之ヲ殺ス

第六十七 源家ノ亡ブ基

清和天皇ヨリ出テ累世武門タリ賴朝ノ世ニ至ルヤ天下ノ權ヲ專ニシ已レ大業ヲ起セリト雖モ賦性殘忍ニシテ猜忌深ク權勢ヲ貪ルト甚シカリシヲ以テ二弟ヲ殺シ叔父義廣行家又從兄弟義仲父子ヲ殺シ總テ源氏ノ血筋ヲ斷チ已レ一門ヲ立ツルノミニシテ執權ヲ妻父

北條氏ニ依リ事ヲ計リシガ故ニ子孫終ニ其亡ス所トナル

第六十八 北條氏頼家ヲ殺セシ原因

頼朝薨スルヤ頼家立テ將軍ト成ル然レハ頼家狂愚ニシテ敢テ政事ヲ顯ス后チ病起ルヤ母政子時政ト議シ天下ノ地頭ヲ二分シ其一分ヲ弟千幡ニ授ケ又一分ヲ子一幡ニ授ケントス一幡ノ外祖比企能員密ニ頼家ト北條氏ヲ滅サント圖ル政子覺テ之ヲ北條氏ニ告ク時政乃チ其族ト謀リ能員ヲ殺シ頼家ヲ幽ス弟千幡ヲ立ツ帝千幡ニ名ヲ實朝ト賜フ后チ時政人ヲシテ頼家ヲ殺サシム

第六十九 北條時政島山重忠ヲ殺セシ

島山重忠ハ智勇忠義ノ人ナリ時政常ニ之ヲ惡ミ一日時政反謀アリト欺リ誘引シ途ニテ之ヲ殺ス

第七十 義時執權トナル故ヲ問フ

北條時政後妻牧氏ノ進メヨリ實朝ヲ廢シテ朝雅ヲ立ント謀ル政子

弟義時ト謀リ時政ヲ伊豆ニ幽シ朝雅ヲ殺シ政子義時ヲシテ政ヲ執ラシム是ニ依テ義時執權職トナル

第七十一 和田義盛兵ヲ起ス

義盛北條氏ノ暴行ヲ惡ミ一族ヲ擧ケテ義時ヲ討ツ利アラスシテ遂ニ死ス

七十二 鶴ヶ岡ノ變

頼家ノ子公曉常ニ父仇ヲ報セント欲シ鶴ヶ岡ノ祠ニ祈ル時ニ實朝右大臣トナリ拜賀ノ禮ヲ鶴ヶ岡ノ祠ニ行フ此時公曉鶴ヶ岡ノ祠ノ別當タリ密ニ忍ヒ窺フ實朝禮畢テ楮ヲ降ラントス暗ニ乘シテ之ヲ斬ル公曉義時ニ捕メラレ殺サル此ニ於テ源氏正統絶ツ

七十三 承久ノ亂

後鳥羽上皇常ニ源氏ヲ惡ミ鎌倉ヲ圖ラントスルノ意アリ院ニ西面ノ士ヲ置キ武事ヲ親ラス實朝害ニ遇フヤ謂エラク王權復スヘシト

然レ北條氏ニ代リテ其權ヲ持スルコト尙ホ故ノ如シ上皇益々不平ナリ上皇遂ニ意ヲ決シ北條氏ヲ滅サント圖ル土御門上皇諫ムレモ聽カズ遂ニ義時ヲ討ツノ宣旨ヲ諸國ニ下シ兵ヲ集ム是ニ於テ義時一族ト議シ東海東山北陸ノ三道ヨリ兵十九万人ヲ率ヒテ直チニ京師ヲ犯サシム京師震駭ス泰時等官軍ヲ破リテ入ル首謀藤原光賴等六人ヲ鎌倉ニ押送ス途ニテ之ヲ斬ル義時帝ヲ廢ス帝即位僅ニ七十余日ノミ後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ土御門上皇ヲ土佐ニ順徳天皇ヲ佐渡ニ遷シ雅成賴仁兩親王ヲ但馬備前ニ徙ス其ヨリ後堀河帝ヲ立ツ是ニ至リテ北條氏ノ勢益々盛大ナリ

第七十四 北條義時ノ專横

源氏滅ブルヤ北條氏代リテ兵權ヲ握リ義時幼主ヲ擁シ自政柄ヲ執リ又承久ノ亂三上皇ヲ遠島ニ遷シ奉リ后ヲ遂ニ大權ヲ奪フニ至ル義時ノ大逆惡ムヘシ

第七十五 三浦泰村ノ誅セラレシ原因

泰村將軍賴經ヲ迎ヘ其位ニ復シ北條氏ヲ滅サント圖ル事覺ル時賴兵ヲシテ之ヲ攻殺ス

第七十六 北條時賴職ヲ辭シテ如何

時賴職ヲ辭シ族長時ニ讓リ剃髮シテ最明寺ニ老ス後僧トナツテ諸國ヲ巡廻シ風俗ヲ觀察シ民ノ疾苦ヲ訪ヒ還リテ賞罰ヲ行フ故ニ諸國ノ吏大ニ勵ミ風化大ニ行ハル

第七十七 弘安ノ役

蒙古國ノ勢甚シ宋ヲ滅シ國ヲ元ト改ム尙ホ隣國ヲ侵略セント欲シ遂ニ日本ニ入ル我軍之ヲ壹岐對馬ニ拒ク利アラズ元兵進テ五龍山ニ據リ大宰府ニ迫ル北條實政兵ヲ督シテ防戰太タカム賊退テ鷹島ヲ保ツ龜山上皇手書ヲ大廟ニ奉シ身ヲ以テ國ニ代ランコト祈ル既ニシテ一夜大雷風嘯キ海湧ク賊艦盡ク覆没シ溺死スルモノ算無シ

少貳景資等兵ヲ指揮シテ奮撃ス遂ニ之ヲ殲クス賊生キテ歸ルモノ
僅カニ三人是ヨリ元復々我ヲ窺ハス之ヲ弘安ノ役ト云フ

第七十八 將軍京師ニ流サルト云フ理由如何

將軍惟康親王北條氏ヲ滅サントス貞時之ヲ覺リ遽ニ廢シ綱代與ニ
倒載シテ送還ス世人之ヲ稱シテ將軍ヲ京師ニ流スト云フ

第七十九 帝北條氏ヲ滅サント圖ル

天帝北條氏ノ專權ヲ憤リ之ヲ亡シ王威ヲ復サントスルノ意アリ依
テ朝臣藤原資朝等ニ謀リ二人ヲ諸國ニ發シ風俗要害ヲ觀察セシメ
又諸國ノ勇士等ト會議シ事ヲ謀ル謀既ニ泄ル高時兵ヲ遣シ資朝等
ヲ捕エ鎌倉ニ拘致シ又以下ノ勇士ヲ襲殺ス遂ニ廢立ヲ謀ラントス
帝高時ヲ諭解シ誓書ヲ賜フテ事釋ク

第八十 元弘ノ亂

皇太子邦良薨スルヤ帝護良親王ヲ立テントス高時其旨ヲ奉セズ後

伏見上皇ノ皇子量仁親王ヲ立ツ帝依テ護良ヲ延曆寺ノ坐主トナス
大塔宮ト云フ親王密ニ帝ト謀ヲ通シ僧徒ノ心ヲ結ヒ其力ニ藉リテ
北條氏ヲ除カント欲ス上皇其密謀ヲ高時ニ告グ高時驚キ兵ヲシテ
京師ヲ犯ス親王之ヲ謀知ス帝竊ニ宮ヲ出テ南都ニ走リ遂ニ笠置山
ニ幸ス藤原師賢御輿ニ乘シ詭リテ帝ト稱シ叡山ニ赴キ六波羅ノ兵
ヲ綴ス六波羅果シテ叡山ヲ攻ム護良親王等僧徒ヲ督シテ之ヲ拒ク
既ニシテ僧徒其眞天子ニアラザルコトヲ覺リ相卒ヒテ叛キ去ル師
賢行在ニ歸ル高時光嚴帝ノ命ヲ奉シ兵ヲ卒ヒテ笠置ヲ犯ス帝ヲ執
ヘテ六波羅ニ遷シ后子之ヲ隱岐ニ遷ス

第八十一 楠正成金剛山ニ城ス

正成城ヲ金剛山ニ築ク赤松則村護良親王ノ命ヲ奉シ播磨ノ苔繩ニ
築キ山陽山陰兩道ヲ絶ツ北條高時大軍ヲ發シ大佛高直二階堂貞藤
阿曾時治等ヲ遣シテ千窟吉野赤坂ヲ攻メシム吉野赤坂陷ル賊軍入

十方ヲ合セテ千窟ニ集リ四方ヨリ攻ム正成僅ニ千餘騎ノ兵ヲ以テ之ヲ拒キ奇計ヲ以テ賊軍ヲ敗ル死スル者算無シ護良親王モ亦土兵ヲ集メテ賊ノ糧道ヲ絶ツ賊益々困ム

第八十二 新田義貞北條氏ヲ亡ス

義貞護良親王ノ令旨ヲ得テ子弟ト共ニ義兵ヲ舉グ北條高時大軍ヲ率ヒテ來リ攻ム義貞擊テ之ヲ破ル義貞勝ニ乘シテ進ミ鎌倉ニ火ヲ放ツ之ヲ攻ム高時ノ軍敗死ス是ニ於テ高時始メ北條舉族皆自殺ス北條氏此ニ亡ブ

第八十三 後醍醐天皇ノ中興

北條高時亡ブルヤ光嚴帝ヲ廢シ帝自ラ立テ政ヲ聽キ全國再ヒ王政ニ歸ス

第八十四 藤原藤房帝ヲ諫ム如何

鹽谷高貞千里ノ馬ヲ獻ス天皇喜テ之ヲ天馬トナス延臣皆ナ賀ス獨

リ藤房帝ヲ諫メテ曰ク天馬ハ平日ニ用ナシ事ナクシテ天馬出テズ何ゾ亂兆ニアラザルヲ知ランヤト固ク諫ムレハ帝更ニ納レズ藤房遂ニ官ヲ棄テ去ル後チ僧トナレリ

第八十五 足利尊氏護良親王ヲ排陷ス

尊氏護良親王ノ英名ヲ忌ミ後醍醐帝ノ寵姫三位局ニ結托シ竊ニ纒ス誣ユルニ謀反ヲ以テス天皇大ニ怒リ親王ヲ幽ス王憂憤上書シテ冤ヲ訴フレハ聽カレス尊氏遂ニ親王ヲ鎌倉ニ流シ土牢ニ幽セシム後北條氏ノ餘黨鎌倉ヲ攻ムルニ當リ直義敗走西セントスルヤ親王ノ後患ヲ爲サンコトヲ恐レ淵邊義博ヲシテ之ヲ殺サシム

第八十六 足利尊氏ノ反

尊氏曾テ源賴朝ノ霸業ヲ繼ガント欲シ竊ニ時變ヲ伺フ時ニ鎌倉亂起ル尊氏好機ヲ得タリト自ラ往キテ征センコトヲ請フ帝之ヲ聽カス尊氏依テ辭セスシテ發ス尊氏弟直義ト亂賊時行ヲ擊テ破ル而シテ

鎌倉ニ入り自ラ稱シテ征夷大將軍東國管領ト云フ又新田義貞ノ勢ヲ忌ミ除キテ以テ朝廷ヲ削弱セント欲シ上書シテ其罪狀ヲ奏ス是ニ於テ反狀始メテ顯ル帝怒テ新田義貞脇屋義助宇都宮公綱菊池武重鹽谷高貞等ヲシテ尊氏ヲ討マシム尊氏兵ヲ遣シ逆ヘ撃ツ義貞戰ヒ之ヲ破ル箱根ニ至ル脇谷義助尊良親王ヲ奉シテ竹下ニ戰ヒ利アラス既ニシテ赤松則村鹽谷高貞大友貞載叛キテ賊ニ應ス官軍敗績義貞京師ニ歸ル賊軍逐フテ西上ス顯家義貞ト撃チテ之ヲ卻ケ進ミ戰ヒテ大ニ賊軍ヲ敗ル尊氏逃レテ西セントス正成之ヲ追撃ス尊氏海ニ航シテ西國ニ走ル

第八十七 湊川ノ戰楠正成ノ戰死如何

尊氏兵ヲ西國ニ擧ク正成弟正季ト共ニ西尊氏ノ軍ニ當ラント欲シテ西ス途ニテ櫻井驛ニ至リ子正行ヲ河内ニ歸シ正成兵庫ニ至リ義貞ニ會ス既ニシテ尊氏ノ軍至ル義貞ト共ニ其軍ニ當ル直義兵數万

ヲ率ヒ須磨ヨリ來ル正成湊川ニ拒ク軍ヲ破テ殆ト直義ヲ獲ントス尊氏兵ヲ分チテ來リ援フ正成賊軍ニ前後ヲ包マレ血戰十六合盡ク其騎ヲ亡フ正成走リテ路傍ノ民舍ニ入り弟正季ト耦刺シテ死ス

第八十八 南朝北朝ト分立シタル原因

足利尊氏光嚴上皇ノ弟豊仁親王ヲ立テ、天皇ト稱フ之レ光明天皇ナリ尊氏後醍醐帝ニヨリ神器ヲ光明天皇ニ讓ラレノヲ願フ是ニ依テ後醍醐帝僞器ヲ授ク而シテ帝吉野ニ幸ス楠正行等兵ヲ率ヒテ吉野ニ至ル此ニ行宮ヲ營ミ南朝ト稱ス又京都光明天皇ヲ北朝トナス之レ分立ノ原因ナリ

第八十九 足利尊氏皇太子ヲ鸞殺ス

尊氏皇太子恒良親王ニ新田義貞ノ所在ヲ問フ太子曰ク義貞自殺セリト尊氏之ノ言ヲ信用セシガ後義貞ノ在ルヲ知リ太子ノ欺言ヲ怒リ遂ニ之ヲ殺ス

第九十 新田義貞戰死

足利高經高師泰等ト越前ニ戰ヒ敗走藤島ニ至ル高經來リ攻ム我軍大ニ敗ル死スルモノ多シ義貞輕騎ヲ以テ進ミ援ク途ニテ賊兵ニ遇ヒ亂射セラル馬矢ヲ被リ澤中ニ顛ル尋テ義貞モ流矢ニ中リ自ラ刎テテ死ス

第九十一 四條畷ノ戰

高師直、師泰等大軍ヲ率ヒテ來リ攻ム楠正行弟正時等ヲ率ヒテ行宮ニ朝シ天顏ヲ拜シテ去リ四條畷ニ至リ賊軍ト戰ヒ大ニ之ヲ破ル又進テ師直ニ逼ル賊連リニ之ヲ射餘ス者五十人正行全身箭ヲ被ル遂ニ弟正時ト相刺シテ死ス師直進テ行宮ヲ犯ス帝穴生ニ幸ス

第九十二 足利尊氏ノ勢力

後醍醐帝既ニ崩スルヤ北朝尊氏ヲ征夷大將軍ニ拜ス全國ノ武士皆ナ足利氏ニ屬ス尊氏勢力ヲ得ルヤ自府ヲ京師ニ開キ式目ヲ定メ政

令ヲ出シ全ク封建ノ勢力ヲ成セリ

第九十三 南北兩朝和合ス

足利義滿北朝ニ神器無キヲ以テ南朝ニ和ヲ求ム曰ク南帝神器ヲ北帝ニ讓リ賜エバ以後ハ兩朝更立セント後龜山帝之ヲ許シ京ニ還幸ス之ニ於テ義滿來降ノ議ヲ用ヒントス帝聽カレヌ遂ニ父子ノ禮ヲ以テ神器ヲ北朝後小松帝ニ讓ル兩朝此ニ至リテ和ス南北兩朝ニ分立シテ南朝四世北朝五世五十七年ニシテ一統ス

第九十四 應永ノ亂

大内義弘西國ノ守護トナリ其勢力盛大ナリ遂ニ反テ謀リ界浦ニ據ル足利義滿兵ヲ遣シ之ヲ攻殺ス應永ノ役之ナリ

第九十五 赤松滿祐義教ヲ殺ス

初メ赤松則村戰功ヲ以テ大國ヲ領ス滿祐ニ至リ勢甚々盛ナリ義教貞村ヲ愛シ滿祐ノ領スル所ノ國ヲ割キテ貞村ニ與ヘント欲ス滿祐

怒リ遂ニ將軍義教ヲ殺ス而シテ幡磨ニ走ル諸將議シテ義勝ヲ立テ又山名持豊ヲシテ滿祐ヲ討テ之ヲ誅ス

第九十六 南朝ノ遺臣乱ヲ起ス

足利義滿南北兩朝ノ和ヲ求ムルニ兩朝更迭シテ立ツルノ約ヲ以テス然レモ足利氏其約定ヲ履行セス是ニ於テ南朝ノ遺臣北畠滿雅等後龜山天皇ノ皇子小倉宮ヲ奉シテ兵ヲ舉ク事畢ヘズシテ戰死ス

第九十七 京師享徳三年ニ乱起ル其原因如何

畠山持國子ナシ姪政長ヲ養ヒ子トス既ニシテ義就ヲ生ム嗣ヲ替ントス政長竊ニ出テ、細川勝元ニ依ル勝元山名持豊ト政長ヲ救フ適々持國ノ第火起ル持國奔テ滿則ノ家ニ入ル義就河内ニ走ル持國乃政長ヲシテ家ヲ繼ガシム事修ル之ヲ享徳年間京師ノ亂ト云フ

第九十八 應仁ノ乱

義政弟義視僧ヲリシニ義政嗣無キヲ以テ義視ヲ嗣トス義政誓テ曰

ク男ヲ生マバ僧トナサント既ニシテ義政義尙ヲ生メリ義政ノ妻義尙ヲ僧トナスニ忍ヒス義視ヲ廢センコトヲ山名宗全ニ托ス宗全即チ義就ヲ召還シ已ガ援トナス細川勝元事アツテ宗全義就ト惡キニ當時宗全義就ノ横恣ナルヲ怒リ勝元政長ト十八州十六萬ノ兵ヲ率ヒ幕府ノ東ニ陣ス宗全乃義就ト謀リ十四州十一萬ノ兵ヲ集メ京師ニ入ル勝元義政ヲ要シテ已チ右ケシメ又宗全ハ義視ヲ擁シ兩軍日月ニ相戰フ既ニシテ宗全卒ス勝元モ尋テ卒ス此間京師兵馬ノ衢トナリ歴朝ノ典籍盡ク兵燹ニ罹ル戰間十一年之レ日本未曾有ノ永戰ナリ

第九十九 天文二十年嚴島ノ戰ヒ如何

陶晴賢義隆ヲ殺シ大友義長ヲ立テ、主トナシ已レ威權ヲ擅ニス此時毛利元就起リ晴賢ヲ嚴島ニ誘ヒ之ヲ誅シ義長ヲ殺ス之レ嚴島ノ亂ナリ

第一百 桶狭間ノ合戦ノ概略如何

駿河ノ人今川義元兵ヲ擧ケ遠江三河ヲ合セ遂ニ京師ニ入ラントシ
兵四万ヲ率ヒ尾張ヲ攻ム織田信長尾張ニ偏起シ兵二千ヲ以テ之ニ
當ル風雨ノ夜ニ乗シテ邀戦シ遂ニ桶狭間ニ敗リ義元ヲ斬ル

第一百 松永久秀將軍ヲ殺ス

松永久秀威權アリ主三好長慶既ニ死ス其ヨリ久秀專横ナリ時ニ將
軍義輝ニ至ル久秀義輝ヲ廢シ義晴ノ子義榮ヲ立テント欲シ遂ニ反
シテ將軍義輝ヲ殺ス義榮ヲ立テ暴威頗ル張ル

第一百二 耶蘇傳來

後奈良天皇天文十二年八月葡萄牙人多爾島ニ至リ天主教ノ耶蘇教ヲ
傳フ大内義隆大友義鎮之ヲ崇信ス之レ其始メナリ

第一百三 足利氏亡ブ

足利義昭將軍トナル既ニシテ織田信長ト協ハス遂ニ之ヲ討ツ信長

兵ヲ發シテ京師ヲ攻ム執ヘテ河内ニ流ス遂ニ毛利氏ニ依ル後慶長
二年薨ス是ニ於テ足利氏亡ブ

第一百四 明智光秀主信長ヲ殺ス

織田信長屢々光秀ヲ罵辱ス又光秀ノ領地ヲ寵臣森蘭丸ニ賜フ光秀
聞テ怒ル時ニ信長本能寺ニ館ス光秀遂ニ反シテ本能寺ヲ襲フ信長
力戰自殺ス光秀二條城ヲ圍ミ信忠ヲ攻殺ス

第一百五 秀吉光秀ヲ誅ス

羽柴秀吉變ヲ聞キ兵ヲ率ヒテ來リ光秀ト山崎ニ合戦ス光秀敗走小
栗栖ニ逃ル土兵四方ヨリ起ル光秀土兵ノ竹槍ニ刺サレテ死ス光秀
信長ヲ殺セシヨリ十三日世人之ヲ三日天下ト云フ

第一百六 賤岳ノ戦ヒ及ヒ七本槍トハ如何

織田信隆勝家一益ト謀リ秀吉ヲ除カントス秀吉之ヲ知リ兵ヲ發シ
テ信孝ヲ岐阜ニ攻ム次テ兵七万ヲ部シテ伊勢ニ入り一益ヲ長島ニ

攻ム勝家兵ヲ發シテ南出ス四月信孝兵ヲ擧ケ勝家ニ應ス秀吉又軍ヲ還シテ岐阜ヲ攻ム佐久間盛政兵一万ヲ以テ夜、賤岳ヲ襲フ中川清秀數千ノ兵ヲ以テ出テ戰フ盛政火ヲ疊下ニ放ツ清秀敗戰之ニ死ス秀吉賤岳ノ報ヲ得踴躍自ラ兵一万五千ヲ提シ風颶シテ馳ス箆壺路ニ咽ヒ炬火天ヲ焚ク盛政美濃路ノ火光ヲ望ミ見テ大ニ驚キ軍ヲ收ントス時二月弦已ニ啓キ千瓢ノ馬標岳上ニ現ス北軍落膽岳北ニ潰走ス秀吉至リ兵ヲ縱チ追撃ス加藤清正福島正則加藤嘉明平野長泰脇坂安治精屋武則片桐且元進ミ戰ヒ遂ニ大ニ盛政ヲ破ル斬首五千之ヲ賤岳ノ七本槍ト云フ而シテ信雄モ亦信孝ヲ攻ム信孝遂ニ自殺ス

第百七 豊臣秀吉朝鮮征伐ノ概要如何

秀吉久シク外征ノ志アレハ海内未平定セザルヲ以テ果サス文錄元年二月ナリシガ秀吉京師ヲ發シ肥前名護屋ニ陣ス諸軍會スル者三

十萬人是ニ於テ八軍ニ分チ朝鮮八道ニ向ハシム浮田秀家元帥タリ加藤清正小西行長各一軍ヲ率ヒ先鋒トナル黒田長政島津義弘福島正則小早川隆景立花宗茂毛利輝元等ノ諸將兵ヲ率ヒテ發ス兵艦海ヲ蔽フテ進ム行長素ヨリ朝鮮地理ヲ知ル諸將朝鮮ニ進ミ入り諸國ヲ攻畧ス五月清正行長道ヲ分チテ進ミ國都ヲ攻ム朝鮮王平壤ニ走リ援ヲ明主ニ請フ明主乃チ其將李如松ニ大兵ヲ授ケテ來リ援ハシム既ニシテ平壤ニ逼ル行長敗レ平壤ヲ棄テ、漢城ニ還ル如松勝ニ乘シテ進ム隆景宗茂等如松ヲ碧蹄館ニ邀ヘ大ニ之ヲ破ル如松身ヲ挺シテ走ル清正既ニ咸鏡道ヲ平ケ朝鮮二王子及大臣等ヲ擒ニシ又進テ兀良哈ニ入り一城ヲ攻テ之ヲ拔キ兵ヲ率ヒテ鏡ニ還ル明既ニ敗ル明軍我勇武ヲ懾ル明人沈惟敬明ト我トノ間ニ和議ヲ求ム是ニ於テ秀吉之ヲ許シ二王子ヲ放還ス遠征ノ將皆歸ル

第百八 朝鮮再征

初メ和議ヲ小西行長ニ圖ルヤ朝鮮ノ全羅慶尙忠清ノ三道ヲ納レ秀吉ヲ以テ明王ニ封セント約ス行長其欺タルヲ知ラス秀吉ニ和ヲ求メシム既ニシテ明使書ヲ以テ來ルニ日本國王ニ封ストアリ又三道ヲ納ル、トアラス秀吉大ニ怒リ再ヒ兵十四万人ヲ發シ加藤清正小西行長等之ニ將トシ朝鮮ヲ討ツ朝鮮敗走ス明王兵ヲ發シテ之ヲ拔ク清正明兵ヲ大ニ敗リ討テ大兵ヲ殺ス未戰終ヲサルニ秀吉病ヲ發ス外征ノ將ヲ召還セヨト遺命シテ薨ス

第九 關ヶ原ノ戰ヒ

石田三成増田長盛小西行長等家康ノ威盛ヲ忌ミ之ヲ除カント欲ス既ニシテ三成職ヲ免シ澤山ノ邑ニ還リ竊ニ謀テ上杉景勝ニ通シ家康ヲ東國ニ誘ヒ西國ノ諸將ト夾撃セントス加藤清正福島正則等ハ三成ノ奸佞ヲ惡ミ家康ニ屬ス景勝既ニ三成ト謀ルヲ以テ其領會津ニ歸ル家康其上京ヲ促カセ世聽カス家康ノ十罪ヲ暴ラス是ニ於テ

家康自大軍ニ將トナリ景勝ヲ討ツ細川忠興福島正則池田輝政等從フ三成乃チ諸將ト議シ毛利輝元ヲ盟主トナシ兵ヲ擧ク關西ノ諸將兵ヲ率ヒテ三成ニ屬ス勢甚々盛ナリ毛利輝元小早川秀秋浮田秀家島津義弘長曾我部盛親大谷義隆ノ諸將三成行長等凡十三万之ニ於テ進ミ遂ニ美濃大垣ニ至ル家康モ亦部下井伊直政本多忠勝等又福島正則細川忠興池田輝政其他諸將ト兵七萬餘ヲ以テ來ル東西兩軍相進ミ大ニ關ヶ原ニ戰フ勝敗未決セサルニ小早川秀秋兩軍ヲ觀望シテ動カズ遂ニ東軍ニ内應シ鋒ヲ轉シテ西軍ヲ撃ツ西軍大ニ敗レ秀家輝元義弘盛親其ノ國ニ逃ル三成行長捕斬セラル義隆戰死ス是ニ於テ事平ク之ヲ關ヶ原ノ戰ト云フ

第十 大坂ノ役

豊臣秀吉初メ京都方廣寺ヲ建テ大佛ヲ納ム其後地震ノ爲ニ破壊シタルヲ以テ秀頼之ヲ修繕シ巨鐘ヲ鑄ル其鐘ノ銘ニ國家安康トアル

ヲ以テ家康怒リ己ノ名ヲ鐘銘中ニ入レ呪咀スルナリト稱シ秀頼ヲ責ム依テ其儀ヲ停ム上騒然タリ片桐且元之ヲ憂ヒ陳謝甚クカム秀頼ノ母淀君却テ且元ヲ疑ヒ遂ニ之ヲ逐フ且元逃レテ茨木ニ至ル時ニ大野治長淀君ノ寵ヲ受ケ其意ノ如クナラザルハナシ治長秀頼ヲ勸メ徳川氏ヲ亡サント圖ル秀頼乃チ前田淺野島津諸將及眞田幸村長曾我部盛親後藤基次其他ノ諸將ヲ集メ兵六万人アリ然ルニ有土ノ侯伯一人モ應ヌル者ナシ家康乃チ子秀忠ト共ニ兵五十萬ヲ發シ大坂ヲ圍ム城兵能ク拒グ勝敗未決セザルニ和成ル依テ城ノ外湟ヲ填メテ兵ヲ止ム之ヲ大坂ノ冬ノ戰ト云フ翌夏秀頼恢復ヲ圖ラント欲シ兵ヲ四方ニ集ム聚マルモノ十五萬人治長幸村基次重成各將トナリ大舉ス家康モ亦大軍ヲ發シテ大坂ヲ圍ミ攻ム二日ニシテ城陷ル秀頼淀君自殺ス治長モ自殺ス幸村基次重成等皆戰死ス余ノ將或ハ死シ或ハ捕斬セラル之ヲ大坂ノ役ト云フ此ニ於テ豊臣氏遂ニ

亡フ

第百十一 徳川幕府ノ法制

幕府貞永建武ノ式目ニ倣ヒ新令ヲ制シテ之ヲ頒ツ曰ク新城郭ヲ築クコトヲ禁シ國家ニ變亂アルモ令旨ヲ得スシテ征スコトヲ止ム諸藩ノ私闘又私婚ヲ禁シ又衣裳ノ割ヲ定ム又乘輿ノ制ヲ立テ内部ヲ規制ス総事嚴重ニ制スルヲ以テ諸般ノ制度大ニ定ル

第百十二 天草ノ役

大友小西亡ビ其遺臣竊ニ耶蘇教ヲ崇信ス時ニ益田時貞主トナリ天草ニ起リ愚民ヲ煽動シ肥前ノ原城ニ據ル幕府板倉重昌等ヲ遣シ之ヲ攻メシム城遂ニ陥リ時貞以下三万七千餘人ヲ殺ス之ニ於テ平ク之ヲ天草ノ役ト云フ

第百十三 慶安ノ亂

由井正雪ナルモノ丸橋忠彌ト事ヲ興サントス謀遂ニ覺レ忠彌誅セ

ラレ正雪自殺ス

第百十四 櫻田ノ變

初メ孝明天皇外交ノ事ヲ水戸ニ勅シテ處分セシム水戸藩及ヒ民間ノ諸人皆攘夷ノ說ヲ唱エ幕府ノ所置ヲ非難シ其計畫ヲ沮止セントス是ニ於テ大老井伊直弼ハ開國說ヲ唱エ遂ニ水戸藩ヲ禁錮シ又民間ノ諸人ヲ斬リ或ハ流シ其刑頗ル酷ナリ水戸藩士憤激シ佐野光明及薩摩ノ士有村兼清等ヲ初メトシ十七人竊ニ江戸ニ入り直弼ヲ櫻田門外ニ刺ス之ヲ櫻田ノ變ト云フ

第百十五 臺灣征伐ノ概略ヲ舉ゲヨ

臺灣ノ蕃人等琉球ノ人民ヲ虐殺シ又小田縣ノ民ヲ劫掠ス朝議依テ陸軍中將西郷從道ヲシテ之ヲ征セシム從道乃兵三千六百人ヲ率ヒテ之ヲ討ツ諸蕃多ク降ル獨リ牡丹社ノ蕃人服セス我軍進テ石門ヲ破リ其酋長ヲ斬テ降ラス是ニ於テ臺灣全ク平ク清國之ヲ聞キ日本

ヲ責ムルニ濫伐ヲ以テス公使柳原前光往復辨論久シク決セス八月一日朝議大久保利通ヲ遣シ清國ニ談判セシム曰ク臺灣ハ清ノ屬國ニアラス若シ之ヲ屬國トセバ清國其罪ヲ負ハサル可カラス果シテ然ラバ軍費ヲ辨償セヨト論シケレバ清遂ニ屈シ償金五十万兩ヲ出シテ謝シ和ヲ成ス

第百十六 西南ノ役ノ概略ヲ記セ

初メ西郷隆盛征韓ノ議合ハザルヨリ遂ニ職ヲ辭シ郷里ニ歸ル桐野利秋篠原國幹等モ亦歸ル鹿兒島ニ於テ兵ヲ舉ケントシ集ムルニ君側ヲ清メントスト遂ニ兵數万人ヲ以テ鹿兒島ヲ發シ進テ熊本鎮臺ヲ攻ム陸軍少將谷干城司命長官タリ兵僅ニ三千ヲ以テ能ク拒ク帝依テ有栖川親王ヲ征討總督トナシ山縣有朋黒田清隆河村純義ヲ以テ參軍トナシ之ヲ征討セシム賊兵ヲ分チ山鹿田原坂吉次越ノ險ヲ阨ス官軍之ト戰ヒ篠原國幹ヲ燼ス之ヨリ連戰賊ヲ敗ル賊兵死ヲ決

ラレ正雪自殺ス

第百十四 櫻田ノ變

初メ孝明天皇外交ノ事ヲ水戸ニ勅シテ處分セシム水戸藩及ヒ民間ノ諸人皆攘夷ノ說ヲ唱エ幕府ノ所置ヲ非難シ其計畫ヲ沮止セントス是ニ於テ大老井伊直弼ハ開國說ヲ唱エ遂ニ水戸藩ヲ禁錮シ又民間ノ諸人ヲ斬リ或ハ流シ其刑頗ル酷ナリ水戸藩士憤激シ佐野光明及薩摩ノ士有村兼清等ヲ初メトシ十七人竊ニ江戸ニ入り直弼ヲ櫻田門外ニ刺ス之ヲ櫻田ノ變ト云フ

第百十五 臺灣征伐ノ概略ヲ舉ゲヨ

臺灣ノ蕃人等琉球ノ人民ヲ虐殺シ又小田縣ノ民ヲ劫掠ス朝議依テ陸軍中將西郷從道ヲシテ之ヲ征セシム從道乃兵三千六百人ヲ率ヒテ之ヲ討ツ諸蕃多ク降ル獨リ牡丹社ノ蕃人服セス我軍進テ石門ヲ破リ其酋長ヲ斬テ降ラス是ニ於テ臺灣全ク平ク清國之ヲ聞キ日本

ヲ責ムルニ濫伐ヲ以テス公使柳原前光往復辨論久シク決セス八月一日朝議大久保利通ヲ遣シ清國ニ談判セシム曰ク臺灣ハ清ノ屬國ニアラス若シ之ヲ屬國トセバ清國其罪ヲ負ハサル可カラス果シテ然ラバ軍費ヲ辨償セヨト論シケレバ清遂ニ屈シ償金五十万兩ヲ出シテ謝シ和ヲ成ス

第百十六 西南ノ役ノ概略ヲ記セ

初メ西郷隆盛征韓ノ議合ハザルヨリ遂ニ職ヲ辭シ郷里ニ歸ル桐野利秋篠原國幹等モ亦歸ル鹿兒島ニ於テ兵ヲ舉ケントシ集ムルニ君側ヲ清メントスト遂ニ兵數万人ヲ以テ鹿兒島ヲ發シ進テ熊本鎮臺ヲ攻ム陸軍少將谷干城司命長官ヲリ兵僅ニ三千ヲ以テ能ク拒ク帝依テ有栖川親王ヲ征討總督トナシ山縣有朋黒田清隆河村純義ヲ以テ參軍トナシ之ヲ征討セシム賊兵ヲ分チ山鹿田原坂吉次越ノ險ヲ阨ス官軍之ト戰ヒ篠原國幹ヲ殲ス之ヨリ連戰賊ヲ敗ル賊兵死ヲ決

シテ可愛嶽ヲ突出シ長驅シテ鹿兒島ニ入ル官軍鹿兒島ニ集ル台戰賊ヲ敗ル賊敗走城山ニ據ル官軍之ヲ圍ミ攻ム既ニシテ賊兵糧食盡ク隆盛諸將ト共ニ戰死ス之ニ至テ平ク時八閱月ナリ之ヲ西南ノ役ト云フ

第一百十七 明治政府ノ組織如何

外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信、宮内此ノ十省ヲ置キ其長官ヲ大臣ト云ヒ副官ヲ次官ト云ヒ大臣ヲシテ内閣員ヲラシメ其上ニ總理大臣一人ヲ置キ以テ内閣ヲ司ラシム而シテ宮内ハ内閣外ニ立テ皇室ノ事務ヲ執ル

受験日本歴史問答終

受験日本地理問答

目次

- 第一 日本國の位置を問ふ
- 第二 日本國は如何なる島嶼によりて成れるや
- 第三 日本國の周圍如何
- 第四 日本國の面積及び人口を問ふ
- 第五 日本國の直徑幾里なるや
- 第六 日本國の經緯度は如何
- 第七 日本國海岸は如何
- 第八 日本全國諸島嶼と合して海岸線は長さ大凡幾里なるや
- 第九 日本帝國の地勢形狀如何
- 第十 日本國四大島の長幅何里なるや

- 第十一 日本國中の山脈を列叙せば如何
- 第十二 本洲に於ける火山系脈五線あり如何
- 第十三 日本著名なる礦泉を擧げよ
- 第十四 日本國中の大なる山は如何
- 第十五 日本國は原野の著名なるものを擧よ
- 第十六 日本國に於ける著名なる河名を擧よ
- 第十七 日本國の大なる海峽を擧よ
- 第十八 日本國の著名なる湖沼を擧よ
- 第十九 日本國府縣所在は位置は如何
- 第二十 日本全國に幾府幾縣あるや
- 第二十一 日本國の區畫及び其名稱を擧よ
- 第二十二 市制施行の地名と列記せよ
- 第二十三 日本全國の學校の數を記せ

- 第廿四 日本國中の寺院神社等の數を記せ
- 第廿五 日本全國師團の數及び所在地名を記せ
- 第廿六 日本海軍鎮守府の數及び其所在港を記す
- 第廿七 日本國の鐵道延長及び工事中の線路里數を問ふ
- 第廿八 日本國內の郵便局は數及び其延長を問ふ
- 第廿九 日本國の電信延長線を問ふ
- 第三十 日本國の重なる産物何ぞ
- 第三十一 畿内の位置を問ふ
- 第三十二 東海道の位置を問ふ
- 第三十三 東山道の位置を問ふ
- 第三十四 北陸道の位置を問ふ
- 第三十五 山陰道の位置を問ふ
- 第三十六 山陽道の位置を問ふ

- 第三十七 南海道の位置を問ふ
- 第三十八 西海道の位置を問ふ
- 第三十九 北海道の位置を問ふ
- 第四十 日本五港及び著明なる港を挙げよ
- 第四十一 日本國著明なる浦灣を挙げよ
- 第四十二 畿内は何國にして何市何區何郡なるや
- 第四十三 畿内の面積及び人口を問ふ
- 第四十四 東海道は何國にして何市何區何郡なるや
- 第四十五 東海道の面積及び人口を問ふ
- 第四十六 東山道は何國にして何市何區何郡なるや
- 第四十七 東山道の面積及び人口を問ふ
- 第四十八 北陸道は何國にして何市何區何郡なるや
- 第四十九 北陸道の面積及び人口を問ふ

- 第五十 山陰道は何國にして何市何區何郡なるや
- 第五十一 山陰道の面積及び人口を問ふ
- 第五十二 山陽道は何國に於て何市何區何郡なるや
- 第五十三 山陽道の面積及び人口を問ふ
- 第五十四 南海道は何國にして何市何區何郡なるや
- 第五十五 南海道の面積及び人口を問ふ
- 第五十六 西海道は何國にして何市何區何郡なるや
- 第五十七 西海道は面積及び人口を問ふ
- 第五十八 北海道は何國に於て何市何區何郡なるや
- 第五十九 北海道は面積及び人口を問ふ
- 第六十 畿内鐵道中其最も著名なる停車場の名を挙げよ
- 第六十一 畿内中著名なる港を挙げよ
- 第六十二 畿内の氣候を問ふ

- 第六十三 東海道鐵道中其最も著名な停車場の名を擧げよ
- 第六十四 東海道著名なる港を擧げよ
- 第六十五 東海道の温度平均如何
- 第六十六 畿内に於ける有名なる山岳の名を擧げよ
- 第六十七 東海道の著名なる山岳と擧げよ
- 第六十八 東山道に於ける著名の山岳を擧げよ
- 第六十九 北陸道に著名の山岳の名を擧げよ
- 第七十 山陰道の著名の山岳の名を擧げよ
- 第七十一 山陽道の著名の山岳の名を擧げよ
- 第七十三 西海道の著名の山岳の名を擧げよ
- 第七十四 北海道の著名なる山岳の名を擧げよ
- 第五十五 東山道の名港を擧げよ
- 第七十六 北陸道の名港を擧げよ

- 第七十七 山陰道に於ける名港を擧げよ
- 第七十八 山陽道の著名の港を擧げよ
- 第七十九 南海道の名港の名を擧げよ
- 第八十 西海道の名港を擧げよ
- 第八十一 北海道の名港の名を擧げよ
- 第八十二 畿内著名なる川流を擧げよ
- 第八十三 東海道の著名の大河を記せ
- 第八十四 東山道にて著き川名を記せ
- 第八十五 北陸道の名川を擧げよ
- 第八十六 山陰道の名河を記せ
- 第八十七 山陽道の名河を擧げよ
- 第八十八 南海道の著名の大河を記せ
- 第八十九 西海道の名川を擧げよ

- 第九十 北海道の著名れ大河を示せ
- 第九十一 畿内に於ける有名の湖沼を挙げよ
- 第九十二 東海道湖沼の著名なるものを挙げよ
- 第九十三 東山道の著名なる湖沼を挙げよ
- 第九十四 北陸道の名湖沼を記せ
- 第九十五 山陰道の著名なる湖沼を挙げよ
- 第九十六 山陽道の著名の湖沼を挙げよ
- 第九十七 南海道の湖沼の著名なるものを挙げよ
- 第九十八 西海道の重なる湖沼を記せよ
- 第九十九 北海道の著しき湖沼を挙げよ
- 第一百 東山道の温度如何
- 第一百一 北陸道の氣候を問ふ
- 第一百二 山陰道の氣候を問ふ

- 第一百三 山陽道の平均氣候を問ふ
- 第一百四 南海道の氣候を挙げよ
- 第一百五 西海道の氣候を問ふ
- 第一百六 北海道の温度と問ふ
- 第一百七 畿名にて著名の岬崎を挙げよ
- 第一百八 東海道にて著名の岬崎を挙げよ
- 第一百九 東山道にて著名の岬崎を挙げよ
- 第一百十 北陸道にて著名の岬崎を挙げよ
- 第一百十一 山陰道の著名なる岬崎を挙げよ
- 第一百十二 山陽道にて著名の岬崎を問ふ
- 第一百十三 南海道の岬崎を問ふ
- 第一百十四 西海道の著名の岬崎を問ふ
- 第一百十五 北海道の有名なる岬崎を問ふ

- 第一百十六 畿内の鑛泉中其最も著名なるものと擧げよ
- 第一百十七 東海道の著名の温泉を問ふ
- 第一百十八 東山道に著名なる温泉を擧げよ
- 第一百十九 北陸道の有名なる温泉を擧げよ
- 第一百二十 山陰道中著名な温泉を擧げよ
- 第一百廿一 山陽道中著名の温泉を記せ
- 第一百廿二 南海道の著き温泉を擧げよ
- 第一百廿三 西海道の重なる温泉を擧げよ
- 第一百廿四 北海道中の重なる温泉を擧げよ
- 第一百廿五 畿内中の平坦なる地を問ふ
- 第一百廿六 東海道の平野を擧げよ
- 第一百廿七 東山道の平坦の地を擧げよ
- 第一百廿八 北陸道の平野を記せ

- 第一百廿九 山陰道の平坦なる地を示せ
- 第一百三十 山陽道の平野を擧げよ
- 第一百三十一 南海道の平坦なる地を擧げよ
- 第一百三十二 西海道の平野を擧げよ
- 第一百三十三 北海道の平野と示せ
- 第一百三十四 畿内の都會を擧げよ
- 第一百三十五 東海道の都會を擧げよ
- 第一百三十六 東山道の都會を擧げよ
- 第一百三十七 北陸道の都會を擧げよ
- 第一百三十八 山陰道の都會を擧げよ
- 第一百三十九 山陽道の都會を擧げよ
- 第一百四十 南海道の都會を擧げよ
- 第一百四十一 西海道の都會を擧げよ

- 第四百十二 北海道の都會を擧げよ
- 第四百十三 畿内諸國の名邑を擧げよ
- 第四百十四 東海道諸國の名邑を擧げよ
- 第四百十五 東山道諸國の名邑と擧げよ
- 第四百十六 北陸道の名邑を擧げよ
- 第四百十七 山陰道の名邑を擧げよ
- 第四百十八 山陽道の名邑を擧げよ
- 第四百十九 南海道の名邑を擧げよ
- 第四百五十 西海道の名邑を擧げよ
- 第四百五十一 北海道の名邑を擧げよ
- 第四百五十二 畿内の都會(京都、大坂、奈良、神戸)の景様を一々示せ
- 第四百五十三 東海道都會(東京、名古屋)の景様を示せ
- 第四百五十四 東海道中島嶼の著名あるものを示せ

- 第四百五十五 東山道の著名の島嶼を擧げよ
- 第四百五十六 北陸道の著名の島嶼を擧げよ
- 第四百五十七 山陰道の著名の島嶼を擧げよ
- 第四百五十八 山陽道の著名の島嶼を擧げよ
- 第四百五十九 南海道の島嶼を擧げよ
- 第四百六十 西海道の島嶼の有名なるものを記せ
- 第四百六十一 北海道の著名なる島嶼を擧げよ
- 第四百六十二 畿内の産物を問ふ
- 第四百六十三 東海道の産物を擧げよ
- 第四百六十四 東山道の産物如何
- 第四百六十五 北陸道の物産を擧げよ
- 第四百六十六 山陰道の産物如何
- 第四百六十七 山陽道の産物を問ふ

- 第六十八 南海道の産物如何
- 第六十九 西海道の産物を挙げよ
- 第七十 北海道の産物を挙げよ

受験日本地理問答目次 終

受験日本地理問答

第一 日本國の位置を問ふ

我日本國は地球の東半球にある帝國にして亞細亞の東邊太平洋の西北に位し本洲の西北は日本海を隔て、支那滿州に接し東北は堪察加樺太に接近す

第二 日本國は如何なる島嶼によりて成れるや

本島九州四國北海道此四大島にて成立せり其他重なる島にて佐渡隱岐壹岐對馬淡路千島琉球小笠原島屋久島種子島其他二千有余島を以て日本一國を成せり

第三 日本國の周圍如何

大約七千十三里なり

第四 日本國の面積及び人口を問ふ

面積大凡二萬四千七百九十四方里なり人口凡四千萬有余人なり

第五 日本國の直徑幾里なるや

北及び東より西南に亘り長さ直徑一千余里あり

第六 日本國の經緯度は如何

緯線は赤道より北緯二十四度六分より起り南端五十五度六分北端に至り

經線偏東百二十二度四十五分に起り百五十六度三十二分に盡く

第七 日本國海岸は如何

北海道の北極に宗谷岬突出し東に知床納沙布兩岬相對して突出し海灣と成せり又南に撰藻岬斗出し繪鞆岬惠岬をして火山灣嵌み入り又辨慶岬斗出せり本洲の北端に尻屋岬出て南は上総安房突出して東京灣を成せり又伊豆國斗出ま又三河國伊良湖岬志摩國と相對まて伊勢海嵌み入り紀伊の湖御岬出て又能登半島出て夫より越前

岬經岬對出して入海を成せり長門の長尻岬之れ本洲の西端なり九州には大隅半島薩摩半島と對出し鹿兒島灣を成す又天草洋あり深く諸國に入込み大灣を成す九州の西端は細岬斗出ありて玄界洋と隔て、壹岐に向ひ四國は南に室戸岬嗟陀岬出て讚岐の西端伊豫の北端出て、燧灘入りたり其他無數海岸出入あれと略す

第八 日本全國諸島嶼と合して海岸線の長さ大凡幾里なるや

大凡一萬五千三百里程なり

第九 日本帝國の地勢形狀如何

地勢は東北より斜めに西南に延長其形恰も蛇龍の「く」字形に臥して海中に浮へるが如し

第十 日本國四大島の長幅何里なるや

長さ率ね一千里余幅員三十里乃至六十里廣袤一ならず

第十一 日本國中の山脈を列叙せば如何

其最も著明なる山脈は本洲にて富士山脈次に白山脈次に北上山脈阿武隈山脈以下恐山脈岩木小脈三國小脈大山脈南海道には劍山脈西海道には英彦山脈北海道には宗谷山脈後方羊蹄山脈等是我國に於て重もかる山脈となす

第十二 本洲に於ける火山系脈五線あり如何

第一北海線中央石狩岳より西南及び東に分岐せる山系あり第二奥羽線として又是れを二系に分つ陸奥北端の恐山之れ現火山あるが之より發えて磐城岩代下野信濃相摸等に達す中間藏王盤梯那須赤城榛名白根淺間箱根の諸山となり以て富士山系の火山脈に通じ一と陸奥の西偏岩本より起り奥羽越後の西北岸に沿ひて信濃に來り遂に前脈に合す中間鳥海湯殿等の諸山なり第三富士線とす奥羽線の恐山より分き諸洲を徑て南に走る中間燒山黒姫淺間富士山三原甌峯等の諸山第四は中國線となす本洲中央の山脈近江に至て兩

支に岐る者其一攝津に偃蹇して亦二線となり一線を四國一線を山陰に匏行して諸州を貫く第五を九洲線となす中國線より來り豊筑の間を分割して肥日隅薩諸國を南徹し分れて南島に去る而して諸山に入る之きなり

第十三 日本著明なる礦泉を擧げよ

全國礦泉の著ききもれば伊香保草津磯部霧積野上那須鹽原野下熱海豆箱根相有馬津攝道後伊等之れあり其他全國所在の礦泉の有名なるもの四百余あり

第十四 日本國中の大なる山は如何

駿河の富士山加賀れ白山信濃の赤石山甲斐の白根山全駒ヶ嶽越中の大連華山信濃の淺間山下野の男體山等なり

第十五 日本國れ原野の著名なるものを擧よ

武総乃際平瀧にして沃野千里れ稱あり下総の習志野小金原常陸の

女化原駿河の富士野遠江の味方原信濃の桔梗原上野の桃井原下野の那須野岩代の對面原磐城の衛山原陸中の一本木陸奥の仙ヶ澤羽前の三形野羽後の大野臺豊後の鶴見石狩の平野釧路の草野武藏野阿部關ヶ原等之れ皆な都會田圃の地なり又利根川の沿岸北上木曾筑後阿武隈吉野石狩十勝の諸川の兩岸根室釧路に沿岸等なり

第十六 日本國に於ける著名なる河名を擧よ

石狩川 長さ百六十里なり 信濃川 長さ六十三里 北上川 長さ七十里 利根川 長さ十三里 天龍川 長さ七十里 木曾川 長さ十五里 最上川 長さ十二里 等之れ皆我國著名の大河なり

第十七 日本國の大なる海峡を擧よ

堪察加と千島の間なるを久留里海峡と云ふ其幅四里なり樺太と北海道と北端宗谷岬と乃間を宗谷海峡と云ふ千島根室の間を根室海峡と云ふ本洲北海道の間なるを津輕海峡と云ふ淡路阿波の間なるを鳴門海峡と云ふ又長崎豊前の間なると赤間關海峡と云ふなり其

他由良明石速吸等れ諸海峡あり

第十八 日本國の著名なる湖沼を擧よ

近江の琵琶湖常陸の霞浦岩代猪苗代出雲中海湖羽後の八郎瀉陸奥小河原湖出雲宍道湖下総の印旛湖陸奥十輪田湖

第十九 日本國府縣所在れ位置は如何

東京府 武藏 大坂府 攝津 京都府 山城 青森縣 陸奥 岩手縣 陸奥 秋田縣 羽後 新瀉縣 越後 福島縣 磐城 宮城縣 陸奥 山形縣 羽前 岐阜縣 美濃 長野縣 信濃 石川縣 加賀 福井縣 越前 富山縣 越中 崎玉縣 武藏 群馬縣 野上 千葉縣 總武 茨城縣 陸奥 栃木縣 野下 神奈川縣 武藏 靜岡縣 駿河 山梨縣 甲斐 三重縣 伊勢 愛知縣 尾張 和歌山縣 紀伊 兵庫縣 攝津 滋賀縣 近江 嶋根縣 出雲 岡山縣 備前 廣嶋縣 安藝 山口縣 周防 徳嶋縣 阿波 高知縣 土佐 愛媛縣 伊豫 香川縣 讃岐 長崎縣 肥前 佐賀縣 肥前 福岡縣 筑前 大分縣 豊後 熊本縣 肥後 鹿兒嶋縣 薩摩 宮崎縣 日向 沖繩縣 沖繩 北海道廳 石狩

第二十 日本全國に幾府幾縣あるや

三府一廳四十三縣なり

第廿一 日本國の區畫及び其名稱を擧よ

一畿八道 畿内東海道東山道北陸道南海道山陽道山陰道西海道北海道

第廿二 市制施行の地名を列記せよ

東京武京都都山城大坂津堺和横濱武神戶津姫路長崎肥前新瀧越水戸常名
古屋尾津伊勢静岡駿河仙臺陸前弘前陸盛岡中山形前羽米澤前羽秋田後羽金澤加
福井前越富山中越高岡中越松江出廣島安岡山山前備赤間關防周和歌山伊紀高松岐
德島阿波松山伊高知土福岡筑久留米筑熊本肥鹿兒嶋薩

第廿三 日本全國の學校の數を記せ

凡ろ一萬千八百余校あり

第廿四 日本國中の寺院神社等の數を記せ

寺院總數十萬七千三百ヶ寺院神社總數二十九萬四千六百余社あり

第廿五 日本全國師團の數及び所在地名を記せ

六師團あり第一東京に置く第二仙臺に置く第三名古屋に置く第四
犬坂に置く第五を廣島に置く第六を熊本に置く

第廿六 日本海軍鎮守府の數及び其所在港を記す

全國に五鎮守府と分ちあれども今にては四ヶ所のみ第一鎮守府を
相摸の横濱港に置く第二鎮守府を安藝の吳港に置く第三鎮守府を
肥前佐世保港に置く第四鎮守府を丹後の舞鶴に置く第五鎮守府は
未だ其場所定まらず

第廿七 日本國の鐵道延長及び工事中の線路里數を問ふ

全國鐵道線路既成の分播磨の「カコ川」より陸奥に青森に達す而して
南北に往來するの線路諸所より發すれども之れを略す

第廿八 日本國內の郵便局の數及び其延長を問ふ

局數凡四千〇五十四ヶ所程延長一萬千九百六十九里許

第廿九 日本國の電信延長線を問ふ

延長大凡六千五百八十六里余なり

第三十 日本國の重なる産物何ろ

金銀銅鐵錫鉛石炭硫黃水晶石材等又米麥豆粟等其他麻綿苧茶藍等特に生糸織物茶陶器漆器等之れ皆外國へ輸出して本國貿易の品なり

第三十一 畿内の位置を問ふ

畿内は我國中央部にありて北方は山陰道に界し東の一半東山道に接し其一半は東海道に隣り南及び西南方は南海道と交錯し西面の一端を山陽道に連りて大阪灣を擁す

第三十二 東海道の位置を問ふ

本道は畿内の東邊本洲の中央少し南部にあり北方は東山道に接し東境も亦東山道及鹿島海に瀕し南は太平洋に面し西部は畿内に隣る

第三十三 東山道の位置を問ふ

本道は全國中の東北部にありて其東北部の一帶は太平洋に臨み西面の一半日本海に瀕し一半は北陸道極北の一角津輕海峽を隔て、北海道に隣る又西南地方の北境は総て北陸道に連り南は東海道に境し極西乃一隅畿内及び山陰道に接す

第三十四 北陸道の位置を問ふ

本道は邦の西北部に位し東南は斜に東山道に接し西南は僅に山陰道に接す西北は日本海に瀕す而して獨り能登は海中に突出してあり

第三十五 山陰道の位置を問ふ

本道は山陽道と共に邦の西部に延長またる地にして即ち日本の西端部にあり北は日本海にして南は総て山陽道に接し東の一角北陸東山兩道に至る東南は畿内又西端の一國を以て山陽道に連絡せり

第三十六 山陽道の位置を問ふ

本道は邦の西部にありて北は山陰道と相背き東は畿内に接す南部は瀬戸内海に枕て四國及び九州と相對し西北は日本海に瀕す

第三十七 南海道の位置を問ふ

邦の西南隅にありて紀伊淡路の二國及び群島を以て此の一道を成せり四國の北端及び西北部は瀬戸海を擁して山陽道と相望む紀伊四國の間に淡路島あり又四國の西南は九州と相對す

第三十八 西海道的位置を問ふ

本道は邦の西南部に位ま九州島及び壹岐對島琉球の四大島其他無數の小島を合して一道を成せり東北は山陽南海に相對し東南は太平洋に西方は東海に瀕し又西北の一端は僅に日本海に至る

第三十九 北海道の位置を問ふ

本道は日本國中の最北部に成立して蝦夷本島及び千島其他群島と

相合し一道と成す北端は宗谷海峽を隔て、魯西亞の樺太に向ひ南は太平洋に臨み東北は千島に連り其東北端の久留里海峽を隔て、魯西亞の堪察加に相對す西南は奥州の津輕海峽を峽みて渡島と對す

第四十 日本五港及び著名なる港を擧げよ

五港とは武藏の濱横港攝州の神戸港肥前長崎港越後の新潟港渡島の函館港之れなり攝津の大坂港伊勢の四日市志摩の鳥羽港伊豆の下田港陸前の石巻港陸奥の青森港羽後の酒田港越前の敦賀港能登の七尾港越中の伏木港安藝の廣島港長門の下ノ關港筑前の博多港薩摩の鹿兒島港對馬の嚴原港琉球の那覇港後志の小樽港等著名港ありの

第四十一 日本國著名なる浦灣を擧げよ

東京灣伊勢海渡島灣松島灣青森灣鹿兒島灣鯛の浦相摸灣筑紫海土

佐灣與謝の海駿河灣濱名灣壽津灣小樽灣根室灣厚岸灣等なり

第四十二 畿内は何國にして何市何區何郡なるや

山城一市二區八郡大和十五郡河内十六郡和泉一市四郡攝津二市四區十二郡

第四十三 畿内の面積及び人口を問ふ

面積四百四十五方哩人口二百三十四萬七千三百有余人なり

第四十四 東海道は何國にして何市何區何郡なるや

伊賀四郡伊勢一市十三郡志摩二郡尾張一市九郡三河十郡遠江十二郡駿河一市七郡甲斐一市九郡伊豆四郡相摸九郡武藏二市十五區廿九郡安房四郡上総九郡下総十五郡常陸一市十二郡

第四十五 東海道の面積及び人口を問ふ

面積二千六百五十余方哩人口九百萬余人なり

第四十六 東山道は何國にして何市何區何郡なるや

近江十三郡美濃一市廿二郡飛驒三郡信濃十六郡上野十七郡下野九郡磐城十四郡岩代十郡陸前一市十四郡陸中一市十八郡陸奥一市九郡羽前二市十郡羽後一市八郡

第四十七 東山道の面積及び人口を問ふ

面積六千八百四十九方哩人口凡八百〇六萬四千九百余人なり

第四十八 北陸道は何國にして何市何區何郡なるや

若狹三郡越前一市八郡加賀一市四郡能登四郡越中二市五郡越後一市十五郡佐渡三郡

第四十九 北陸道の面積及び人口を問ふ

面積千六百三十四方哩人口凡三百七十四萬六千六百余人なり

第五十 山陰道は何國にして何市何區何郡なるや

丹波七郡丹後五郡但馬八郡因幡一市八郡伯耆六郡出雲一市十郡石見六郡隱岐四郡

第五十一 山陰道の面積及び人口を問ふ

面積一千百〇九方哩人口凡百七十八萬四千三百余人なり

第五十二 山陽道は何國にまて何市何區何郡なるや

播磨一市十六郡美作十二郡備前一市八郡備中十一郡備後十四郡安藝一市八郡周防六郡長門一市六郡

第五十三 山陽道的面積及び人口を問ふ

面積千五百七十方哩人口凡三百九十五萬七千八百余人なり

第五十四 南海道は何國にして何市何區何郡なるや

阿波一市十郡讃岐一市十二郡伊豫一市十八郡土佐一市七郡紀伊一市十郡淡路二郡

第五十五 南海道的面積及び人口を問ふ

面積千五百九十九方哩人口凡三百六十四萬六千四百余人なり

第五十六 西海道は何國にして何市何區何郡なるや

筑前一市十五郡筑後一市十郡豊前八郡豊後十郡肥前一市十六郡肥後一市十五郡日向十郡大隅十一郡薩摩一市十四郡壹岐二郡對馬二郡琉球四十三間切

第五十七 西海道的面積及び人口を問ふ

面積二千八百二十五方哩人口凡五百九十萬三千四百八十余人なり

第五十八 北海道は何國にして何市何區何郡なるや

渡島一市六郡後志十七郡石狩一市九郡天鹽六郡北見八郡釧路八郡日高七郡十勝七郡釧路六郡根室五郡千島九郡

第五十九 北海道の面積及び人口を問ふ

面積六千〇九十五方里人口凡二十二萬六千五百余人あり

第六十 畿内鐵道中其最も著名なる停車場の名を擧げよ

東海道鐵道京都停車場に續き大坂梅田停車場に至る大坂に湊町停車場あり難波停車場あり此線路は堺市に至る

第六十一 畿内中著名なる港と擧げよ

攝津の大坂港和泉の堺港攝津の神戸港之をなり

第六十二 畿内の氣候を問ふ

大坂地方の最も高温度を三十五度又最低度を零下二度平均温度は十四度又京都地方も亦各一二度の相違のみにして先づ全様なり

第六十三 東海道の鐵道中其最も著名な停車場の名を擧げよ

名古屋停車場あり静岡停車場あり横濱停車場あり東京新橋停車場あり水戸停車場あり

第六十四 東海道著名なる港を擧げよ

伊勢四日市志摩鳥羽尾張龜崎三河大濱遠江掛塚駿河清水伊豆太田田子相摸浦賀横須賀武藏横濱下総銚子等之れなり

第六十五 東海道の温度平均如何

東京地方にして十三度沼津地方にて十五度濱松地方にて十四度

第六十六 畿内に於ける有名なる山岳れ名を擧げよ

山城に鞍馬山比叡山愛宕山高雄山嵐山大和(大和伊賀の間にあり)に笠置山大峯山七面山大日岳大台原山吉野山河内に葛城山生駒山金剛山和泉に槇尾等なり

第六十七 東海道の著名なる山岳を擧げよ

駿河の富士山之れ第一なり次に愛鷹山尼岳鈴鹿山秋葉山朝熊山赤石山金峯山地藏山駒ヶ岳身延山筑波山等なり

第六十八 東山道に於ける著名の山岳を擧げよ

比良峯伊吹山三國岳惠那山養老山乗鞍駒ヶ嶽御嶽戸隠山黒姫山淺間山盤梯山等なり

第六十九 北陸道の著名な山岳の名を擧げよ

白山大日岳大蓮華山國見山等なり

第七十 山陰道の著名の山岳の名を擧げよ

大江山三岳山水の山千丈岳由良岳來日嶽鷲峯天狗山等なり

第七十一 山陽道の著名の山岳の名を擧げよ

笠形山御嶽山書寫山泉山大王山三井山天神山御神山白木山鬼城山
秘密嶽如意山高山等なり

第七十二 南海道の著名なる山岳の名を擧げよ

那智山大塔峯高野山黒笠山佐野山先山登尾山琴平山石槌山五在所
山雪光山等なり

第七十三 西海道の著名の山岳れ名を擧げよ

御笠山福智山御前岳英彦山九重山多良岳阿蘇山内大臣山黒内山京
山朝日山飯盛山等なり

第七十四 北海道の著名なる山岳の名を擧げよ

駒岳千軒嶽後方羊蹄山紋別嶽等なり

第七十五 東山道の名港と擧げよ

右巻港小名濱港青森港酒田港

第七十六 北陸道乃名港を擧げよ

小濱敦賀港坂井港安宅港伏木港新瀉港夷港

第七十七 山陰道に於ける名港を擧げよ

山陰道にては舞鶴港諸寄港堺浦港外浦あり

第七十八 山陽道の著名の港を擧げよ

室津港牛窓港吳港赤間關港等なり

第七十九 南海道の名港の名と擧げよ

尾鷲港三木島港宇久井港勝浦港大島港由良港津田港加島港小田港
高松港丸龜港等なり

第八十 西海道の名港を擧げよ

若松港小倉港竹田津港伊萬里港名護屋港水股港東海港鹿兒島港瀬
戸浦港等なり

第八十一 北海道乃名港の名を擧げよ

函館港小樽港室蘭港石狩港釧路港根室港宗谷港等なり

第八十二 畿内著名なる川流を擧げよ

宇治川木津川等なり

第八十三 東海道の著名の大河を記せ

木曾川天龍川大井川富士川多摩川荒川利根川那珂川櫛田川庄内川

馬入川安部川矢作川等なり

第八十四 東山道にて著しき川名を記せ

信濃川阿武隈川最上川黒股川楫斐川等あり

第八十五 北陸道に名川を擧げよ

信濃川小阿賀川神通川九頭龍川大聖寺川等なり

第八十六 山陰道の名河を記せ

保津川和知川江川大川等あり

第八十七 山陽道の名河を擧げよ

高田川津山川三次川櫃田川等なり

第八十八 南海道の著明の大河を記せ

吉野川日高川熊野川紀伊川等なり

第八十九 西海道の名川を擧げよ

川内川筑後川大野川五箇瀬川耳川一の瀬川大淀川等なり

第九十 北海道の著名の大河を示せ

石狩川天鹽川大津川久壽川等なり

第九十一 畿内に於ける有名の湖沼を擧げよ

巨椋池納所沼六地藏沼四名村沼一口沼等周回二里以上ものなり

第九十二 東海道湖沼の著名なるものを擧げよ

霞浦北浦印幡沼入鹿池川口湖箱根湖等なり

第九十三 東山道の著名ある湖沼を擧げよ

琵琶湖諏訪湖猪苗代湖十和田湖十三瀉小河原沼琴湖等なり

第九十四 北陸道の名湖沼を記せ

三方湖北瀉八田瀉等なり

第九十五 山陰道の著名なる湖沼を挙げよ

宍道湖中海湖山池東郷池等なり

第九十六 山陽道の著名の湖沼を挙げよ

大池長澤池常盤池等なり

第九十七 南海道の湖沼の著名なるものを挙げよ

松尾池北條池満濃池神田池等なり

第九十八 西海道の重なる湖沼を記せよ

池田湖鴨生田池大浪池流池等なり

第九十九 北海道の著しき湖沼を挙げよ

大沼降確沼篠路沼打内沼保利加也仁沼藻散布沼猿拂沼等なり

第一百 東山道の温度如何

平均十四度(本道の西部)位より九度五分(本道の東部)なり

第一百一 北陸道の氣候を問ふ

本道は平均十二三度なり

第一百二 山陰道の氣候を問ふ

平均十二三度なり

第一百三 山陽道の平均氣候を問ふ

平均十五度位なり

第一百四 南海道の氣候を挙げよ

十五六度なり

第一百五 西海道の氣候を問ふ

十四度五分より十五度位なり

第一百六 北海道の温度を問ふ

其最も低度に至りては函館地方にて零下十五度三分札幌地方にて全廿二度八分根室地方にて全十五度八分襟裳地方にて全九度八分分宗谷地方にて全十三度位なり

第一百七 畿内にて著名の岬崎を挙げよ

和田岬観音崎等なり

第一百八 東海道にて著名の岬崎を挙げよ

石廊崎雲見崎稻村崎真鶴崎剣崎犬吠岬野島岬御前岬伊良湖岬大王崎等なり

第一百九 東山道にて著名の岬崎を挙げよ

尻屋岬鱸作崎入道岬等なり

第一百十 北陸道にて著名の岬崎を挙げよ

越前岬高岩岬珠洲岬等なり

第一百十一 山陰道の著名なる岬崎を挙げよ

經岬地藏岬等なり

第一百十二 山陽道にて著名の岬崎を問ふ

網崎蕪崎米崎沼出崎阿武兔岬赤石岬宇部御崎川尻岬高山岬等なり

第一百十三 南海道の岬崎を問ふ

湖御岬蒲生田岬室戸岬蹉跎岬佐田岬松尾岬生石崎小串岬観音崎屋島崎由良岬等なり

第一百十四 西海道の著名の岬崎を問ふ

野間岬大山岬都井岬妙見崎大門崎黒崎波戸岬志岐崎部崎長奇開聞岬神崎御崎用崎等なり

第一百十五 北海道の有名なる岬崎を問ふ

惠山岬辨慶岬ヲカモイ岬宗谷岬知床岬納沙布岬撰藻岬繪鞆岬あり
第一百十六 畿内の鑛泉中其最も著名なるもれを挙げよ

東泉寺柳本有馬等なり

第一百七 東海道の著名の温泉を問ふ

湯島熱海湯本修善寺土肥塔の澤御館芝原等なり

第一百八 東山道に著名ある温泉を舉げよ

鹿鹽釜戸沓掛諏訪靈泉寺岳湯伊香保鹽川湯河原下呂湯原駒湯湯野濱等あり

第一百九 北陸道の有名ある温泉を舉げよ

山中粟津湯涌深谷黒薙大牧湯澤稻島蒲原大湯等あり

第二百十 山陰道中著名の温泉を舉げよ

湯島岩井勝見三朝湯關玉造温泉津志學等なり

第二百十一 山陽道中著名の温泉を記せ

湯郷湯原八木村湯本湯谷町等なり

第二百十二 南海道の著名の温泉を舉げよ

龍神道後別役鶴湯等なり

第二百十三 西海道の重なる温泉を舉げよ

湯平濱脇湯坪古温立願寺湯浦硫黄谷二月田彌次湯湯河内等なり

第二百十四 北海道中の重なる温泉を舉げよ

惠山河吸富湯下湯川登別湯丈山湯鑛山湯等なり

第二百十五 畿内中の平坦なる地と問ふ

淀川下流地方大和川沿岸等

第二百十六 東海道の平野を舉げよ

關東八州及び尾三地方平坦の地なり

第二百十七 東山道の平坦の地を舉げよ

奥洲の海濱は大抵平坦なり近江に野州蒲生等又木曾川の沿岸等大抵平坦の地あり

第二百十八 北陸道の平野を記せ

越中加賀乃海濱は土地平坦信濃川の下流も亦平坦の地なり

第百廿九 山陰道の平坦なる地を示せ

本道は山岳多くして平野少しなり加露川の下流宍道湖の南側等にあり

第百三十 山陽道の平野を舉げよ

播磨の海邊にあり津山川の沿岸等

第百三十一 南海道の平坦なる地を舉げよ

吉野川の沿岸讃岐の北方阿波東方は之れ皆な平坦の地なり

第百三十二 西海道の平野を舉げよ

筑後川内川の下流沿岸日向の海岸等平坦の地なり

第百三十三 北海道の平野を示せ

石狩川天鹽川十勝川の沿岸釧路根室の海岸皆な平地なり

第百三十四 畿内の都會を舉げよ

京都大坂神戸奈良等なり

第百三十五 東海道の都會を舉げよ

東京横濱名古屋千葉水戸津靜岡甲府等なり

第百三十六 東山道の都會を舉げよ

岐阜大津長野前橋宇都宮福島仙臺盛岡青森山形秋田等なり

第百三十七 北陸道の都會を舉げよ

福井金澤富山新瀉等なり

第百三十八 山陰道の都會を舉げよ

鳥取松江を以て都會とす

第百三十九 山陽道の都會を舉げよ

岡山廣島山口等なり

第百四十 南海道の都會を舉げよ

和歌山徳島高松松山高知等なり

第百四十一 西海道の都會を舉げよ

福岡大分佐賀長崎熊本宮崎鹿兒島等なり

第四百十二 北海道の都會を擧げよ

函館札幌根室等なり

第四百十三 畿内諸國の名邑を擧げよ

(山城) 淀、宇治、木津、(大和) 橿原、小泉、初瀬、松山、田原、本、今井、高田、五、(河内) 寺、八尾、富田、(和泉) 堺、貝塚、岸、(攝津) 西の宮、難波、住吉、富田、天王寺、尼ヶ崎等なり

第四百十四 東海道諸國の名邑を擧げよ

(伊賀) 上野、(伊勢) 四日市、桑名、龜山、關、(志摩) 鳥羽、(尾張) 熱田、龜崎、犬山、蟹江、(三河) 豐橋、大濱、舉母、西尾、(遠江) 濱松、中泉、新居、掛塚、(駿河) 田中、清水、(甲斐) 谷村、(上野) 吉田、(伊豆) 下田、三島、(相模) 小田、原、藤澤、横須賀、(武藏) 熊谷、板橋、千住、鳩巢、加、岩槻、河越、府中、八王、(安房) 館山、(上総) 木更、飯野、八幡、東、(下総) 古河、關宿、船橋、結子、保土ヶ谷、神奈川、(安房) 館山、(上総) 金、津、舞鶴、一宮、(下総) 城、佐原、深子、佐倉、(常陸) 土浦、石岡、磯濱、那珂、港、等なり

第四百十五 東山道諸國の名邑を擧げよ

(近江) 彦根、堅田、八幡、長、(美濃) 高須、竹鼻、加納、北方、中、(飛騨) 高山、古、飯山、上、田、飯田、岩村、田、(上野) 高崎、安中、桐生、館林、(下野) 栃木、佐野、鹿沼、小山、鳥山、高遠、下、諏訪、松代、小諸、(磐城) 平、白河、小名、濱、角、(岩代) 若松、猪苗代、坂下、須賀川、郡、(陸前) 石巻、岩沼、涌谷、登、(陸中) 宮古、水澤、花巻、釜石、花輪、一、(陸奥) 戸、黒石、七戸、八、(羽前) 新庄、鶴岡、上山、寒、澤、宮内、天童、(羽後) 横手、酒田、大館、松嶺、本莊、龜田、大曲、等なり

第四百十六 北陸道の名邑を擧げよ

(若狭) 小濱、(越前) 敦賀、鯖江、丸岡、大野、(加賀) 大聖寺、小松、松任、鶴來、(能登) 七尾、津、宇出、(越中) 魚津、水橋、今石、動、新湊、(越後) 岩船、沼垂、三條、村松、新發田、村上、白根、加、長岡、小千、(佐渡) 相川、小千、等なり

第四百十七 山陰道の名邑を擧げよ

(丹波) 龜岡、福知山、(丹後) 舞鶴、峯山、(但馬) 豊岡、生野、(因幡) 加奴、潮津、(伯耆) 米、坂、赤崎、(出雲) 美保、關、安來、(石見) 濱田、益田、(隱岐) 西郷、

第四百十八 山陽道の名邑を擧げよ

(播磨)姫路、高砂、飾磨、室津、(美作)津山、久世、(備前)虫明、西大寺、下、(備中)笠岡、高梁、
足守、(備後)尾道、鞆津、三原、(安藝)瀬戸、洗、吉田、(周防)津、三田尻、室積、(長門)赤間、
豊浦、萩、等なり

第四百十九 南海道の名邑を擧げよ

(紀伊)宮、黒江、粉河、田邊、(淡路)洲本、志築、濱、(阿波)撫養、池田、富岡、脇町、(讃岐)引田、
坂出、丸龜、觀音寺、津田、(伊豫)宇和島、西條、今治、大、(土佐)中村、赤岡、野池、須、
香西、宇足津、琴平、津田、(伊豫)洲、川江、小松、三津、(土佐)崎安藝、山田、高岡、

第四百五十 西海道の名邑を擧げよ

(筑前)屋、博多、箱崎、甘木、(筑後)久留米、吉井、柳川、(豊前)小倉、中津、大橋、(豊後)杵、
別府、森岡、關白、杵、(肥前)蓮池、諫早、大村、時津、伊万里、有田、(肥後)人吉、長洲、隈府、八、
日出、鶴崎、佐賀、佐伯、(肥前)小城、島原、彼杵、深堀、唐津、(肥後)代高瀬、川尻、宇土、
湯町、(日向)延岡、美々津、都城、廣瀬、(大隅)加治木、福山、(薩摩)宮之城、阿久根、揖、
宿、鹿籠、川内、出水、

第四百五十一 北海道の名邑を擧げよ

其最も著きものは福山江刺幌内小樽室蘭等あり

第四百五十二 畿内の都會京都大坂奈良神戸の景様を一々示せ

京都は舊平安と云ふ天皇代々の皇居ありしが維新以來西京と呼ぶ市街清潔人口凡二十二萬余人鴨川市の東を流れ山多くして景色可なるを以て四季來遊人の絶つることなし

大坂は古より商法繁盛の地なり府廳鎮臺造幣局其他官立のもの許多ありとも累す當時人口三十六万七千七百余人あり頗る繁盛の地なり

奈良は南都と稱して昔皇居たり世人宜く知れる彼の大佛此の地にあり又縣廳あり人口凡二万二千六百余人なり

神戸は貿易場にして日本五港の一なり縣廳あり停車場あり人口凡ろ八萬余なり

第四百五十三 東海道都會東京名古屋の景様を示せ

東京は徳川幕府の頃江戸と云ひたりが明治天皇の皇居となるや

夫れより改めて東京と呼ぶ我國第一の大都なり市中に十五區あり官衙幾多あり鐵道諸に通じ繁盛の地なり
名古屋は三府に繼ぐ都會にして日本無双の金城あり商法繁盛運搬便利の地あり

第百五十四 東海道中島嶼の著名あるものを示せ

伊豆七島大島、利島、新島、神津島、三宅島、御倉島、八丈島、又小笠原島の父島、母島、兄島、弟島、姉島、妹島、鯨島等なり

第百五十五 東山道の著名の島嶼を擧げよ

寒風、桂島、飛島、田代島、金華山島等なり

第百五十六 北陸道の著名の島嶼を擧げよ

本道著名の島は粟生島最も名なり

第百五十七 山陰道の著名の島嶼を擧げよ

毛島、冠島、大根島、外江島、高島、松島、知夫里島等なり

第百五十八 山陽道の著名の島嶼を擧げよ

家島、神島、田島、生口島、嚴島、笠戸島、引島等著名なり其他島嶼許多あり

第百五十九 南海道の島嶼を擧げよ

大島、大毛島、小豆島、豊島、廣島、大三島、沖島等なり又此他數多の島嶼あり

第百六十 西海道の島嶼の有名なるものを記せ

殘島、志賀島、立界島、小呂島、相島、姫島、大野、小中島、竹崎島、香燒島、平島、天草島、大島、興論島、沖永良部島、種子島、屋久島、大島、惡石島、硫黃島、獅子島、甌島等なり

第百六十一 北海道の著名なる島嶼を擧げよ

大島、小島、寶島、奥尻島、燒島、天爪島、水品島、利尻島、福文島等なり

第百六十二 畿内の産物を問ふ

織物、繻物、染物、木綿、茶、御影石、淀川、鯉、天皇寺、蕪、池田炭、吉野紙、密柑、藤細

工、鯨細工、角細工、一貫張、薄雪、昆布

第三百六十三 東海道の産物を挙げよ

陶器類、織物、時雨蛤、真珠、宮重大根、油、名倉石、水晶、硝石、蠶卵紙、漆器、石材、八丈絹、雁皮紙、硫黄具細工、生糸、五日市織、青梅綿、鑄物、煉化石、革細工、蒔繪細工、石炭、銚子縮、結城紬、味噌、醬油、酒、砂糖等なり

第三百六十四 東山道の産物如何

縮緬、羽二重、蚊帳、晒布、茶酒、蜂蜜、紬、陶器、菅笠、信夫摺、王川織、仙臺平、生糸、銀、銅、銚、硫黄、杉、檜、八丈絹等なり

第三百六十五 北陸道の物産を挙げよ

塗物、生糸、酒、厚紙、鯖、金、銀、銅、鉛、石炭、石灰、奉書紙、漆器、熊膽、瑪瑙、鐵器、象眼細工、上布、五泉平、團扇、砥石等なり

第三百六十六 山陰道の産物如何

縮緬、煙草、金、銀、白珊瑚、木綿、密柑、人參、紙等なり

第三百六十七 山陽道の産物を問ふ

赤穂鹽、龍野醬油、雲齊織、小倉織、真田織、疊表、銅、牡蠣、浪石、麻糸、縮布、辨慶蟹、竹細工等なり

第三百六十八 南海道の産物如何

高野紙、密柑、雲齊織、藍、木材、砂糖、紬、銀、銅、堅魚節、珊瑚等なり

第三百六十九 西海道の産物を挙げよ

博多織、久留米、繻、生蠟、小倉織、硯、豊後米、麥、紙、煙草、燒物類、酒類、海魚等なり

第三百七十 北海道の産物を挙げよ

昆布、海苔、鮭、鱒、鯡、鱈、鯨、海鰻、魚、鱈、比目魚、鰻、鯨、海、鼠、海、扇、牡、蛎、刺、蛤、水、豹、臘、肭、臍、臘、虎、鉛、亞、鉛、砂、金、砂、鐵、大、理、石、瑪、瑙、紋、別、石、石、筆、硫、黄、明、礬、石、炭、陶、土、松、柳、檜、樺、楓、槐、楸、厚、朴、蠟、木、苔、提、樹、落、葉、松、ナ、ヒ、ヨ、ウ、ホ、ッ、ア、ス、煙、草、菊、葡、萄、藍、秦、皮、斑、竹、ア、ッ、シ、織、彫、物、等、な、り

受驗
必讀
日本地理問答終

明治二十五年三月七日印刷
明治二十五年三月八日出版

定價拾錢

版權
所有

著作者兼
發行者

三尾信太郎

名古屋市整杉ノ町三十七番戶

印刷者

櫻井仙右衛門

名古屋市小田原町三十二番戶

發兌元

共同出版社

名古屋市玉屋町八十二番戶

共同出版社圖書賣捌所

名古屋市本町三丁目

發賣人 金華堂 川瀨代助

全本町五丁目

全 大成堂 若山文二郎

全 玉屋町一丁目

全 東雲堂 木田吉太郎

全 玉屋町三丁目

全 百架堂 小澤吉三郎

全 門前町三丁目

全 文昌堂 淺見銍太郎

